

日蓮大聖人御書全集

しょうぐもんどうししょうじょうげ

聖愚問答抄上下

新版
544
〜
581

聖愚問答抄上

ぶんえい ねん

文永5年 ('68)

47歳 さい

そ しょう う し まぬか ことわり かしこ みかど

夫れ、生を受けしより死を免れざる理は、賢き御門

いや たみ いた ひと ひと

より卑しき民に至るまで人ごとにこれを知るといえども、

まこと だいじ なげ もの せんまんじん いちにん あ

実にこれを大事としこれを歎く者、千万人に一人も有り

難 むじよう げんき み うと おそ した

がたし。無常の現起するを見ては疎きをば恐れ親しきをば

なげ さきだ 果 無 とど 賢

歎くといえども、先立つははかなく留まるはかしこきよう

おも きのう か 業 きよう

に思つて、昨日は彼のわざ今日はこのこととて、いたずら

せけん ごよく 絆 はつく 影 す ひつじ あゆ

に世間の五欲にほだされて、白駒のかげ過ぎやすく羊の歩

ちか

知

むな

えじき

ごく

み近づくことをしらずして、空しく衣食の獄につながれ、

みょうり

あな

墮

さんず

ふるさと

かえ

ろくどう

いたずらに名利の穴におち、三途の旧里に帰り六道の

巷

りんね

こころあ

ひと

たれ

なげ

たれ

ちまたに輪回せんこと、心有らん人、誰か歎かざらん、誰

かな

か悲しまざらん。

ろうしようふじよう

しやば

なら

えしやじようり

う

よ

ああ、老少不定は娑婆の習い、会者定離は浮き世の

理

はじ

おどろ

しょうか

はじ

ことわりなれば、始めて驚くべきにあらねども、正嘉の初

よ

はよ

ひと

み

おさな

こ

め世を早うせし人のありさまを見るに、あるいは幼き子を

振捨

お

おや

とど

置

そうねん

ふりすて、あるいは老いたる親を留めおき、いまだ壮年の

よわい

こうせん

たび

おもむ

こころ

なか

かな

齢にて黄泉の旅に趣く心の中、さこそ悲しかるらめ。行

い

悲

とど

悲

か

そおう

しんじよ

ともな

くもかなしみ、留まるもかなしむ。彼の楚王が神女に伴い

なき

いっぺん

あした

くも

のこ

りゆうし

せんきやく

あ

し、情けを一片の朝の雲に残し、劉氏が仙客に値いし、

おも

しちせ

こういん

なぐさ

よ

もの

なに

よ

うれ

思いを七世の後胤に慰む。予がごとき者、底に縁つて愁い

やす

やまがつ

卑

こころ

み

おも

を休めん。「かかる山左のいやしき心なれば、身には思い

無

い

ひと

ふるい

おも

い

すえ

のなかれかし」と云いけん人の古事さえ思い出でられて、末

よ

忘

形見

なにわ

藻

塩ぐさ

の代のおすれがたみにもとて、難波のもしお草をかきあつ

みず

茎

跡

かた

記

置

め、水くきのあとを形のごとくしるしおくなり。

かな

いた

われ

むし

このかた

むみよう

さけ

悲しいかな、痛ましいかな。我ら無始より已来、無明の酒

よ

ろくどうししよう

りんね

とき

ししようねつ

だいししようねつ

ほのお

に酔つて六道四生に輪回して、ある時は焦熱・大焦熱の炎

咽

とき ぐれん だいぐれん こおり 閉

とき

にむせび、ある時は紅蓮・大紅蓮の氷にとじられ、ある時は

がき けかち かな あ ごひやくしよう あいだおんじき な き

餓鬼の飢渴の悲しみに値つて五百生の間飲食の名をも聞

とき ちくしよう ざんがい くる ちい おお

かず。ある時は畜生の残害の苦しみをうけて、小さきは大き

呑 みじか なが 巻 ざんがい く い

なるにのまれ、短きは長きにまかる。これを残害の苦と云う。

とき しゅち とうじよう く とき にんげん う

ある時は修羅の鬪諍の苦をうけ、ある時は人間に生まれて

はつく 受 しょう ろう びよう し あいべつりく おんぞうえく ぐふとつ

八苦をうく。生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得

く ぐじようおんくとう とき てんじよう う ぐすい

苦・五盛陰苦等なり。ある時は天上に生まれて五衰をうく。

さんがい あいだ しゃりん まわ ふし なか

かくのごとく三界の間を車輪のごとく回り、父子の中にも、

おや おや こ こ 覚 ふうふ あ あ

親の親たる、子の子たることをさとらず。夫婦の会い遇える

も、あ会あい遇あいたることをしらず。まよ迷えることはようもく羊目に等しく、

くら暗きことはろうげん狼眼に同じ。われ我を生うみたる母の由来をははもしらず、知知

しょう生を受けたる我が身も、わ死しの終おわりをしらず。

あああ、う受け難がたき人界にんかいの生しょうをうけ、あ値がたい難にき如来によらいの聖教しょうぎように

あ値たてまつい奉いちげんれり。かめ一眼うの亀ぎの浮あなき木遭の穴いにあえるがごとし。

こんど今度しょうじもし生死しやうじのき絆ずなを切きさんがいらず、ろうはん三界いの籠い樊いを出いでざらんこ

悲と、あかなあしあかるべし、あかなあしあかるべし。

ちじんきたここに、ある智人しめ来いつて示なんじして云なげわく、なげ汝なげが歎なげくところ

まこと実まことにむじようしかなり。むじようかくのごとく無常むじようのことわりをおも思いし知り

ぜんしん おこ もの りんかく まれ さと

善心を発す者は、鱗角よりも希なり。このことわりを覚ら

あくしん おこ もの ぎゆうもう おお なんじはや しょうじ はな

ずして悪心を発す者は、牛毛よりも多し。汝早く生死を離

ぼだいしん おこ おも われさいだいいち ほう し こころざし

れ菩提心を発さんと思わば、吾最第一の法を知れり。志

なんじ と き

あらば、汝がためにこれを説いて聞かしめん。

とき ぐにんぎ た たなごころ あ い われ

その時、愚人座より起つて掌を合わせて云わく、我は

ひごろげてん がく ふうげつ こころ 寄 ぶつきよう

日来外典を学し風月に心をよせて、いまだ仏教というこ

いさい ねが しょうにん われ と

とを委細にしらず。願わくは上人、我がためにこれを説き

たま

給え。

とき しょうにん い なんじ みみ れいりん みみ よ め

その時、上人の云わく、汝、耳を伶倫が耳に寄せ、目を

りしめ まなこ 借 こころ 静 われ おし なんじ

離朱が眼にかつて、心をしずめて我が教えをきけ。汝が

ためにこれを説かん。

そ ぶつきよう はちまん しょうぎようおお しょしゆう ふぼ

夫れ、仏教は八万の聖教多けれども、諸宗の父母た

かいりつ てんじく せしん めみようとう

ること、戒律にはしかず。されば、天竺には世親・馬鳴等の

さつた とうど えこう どうせん ひと おも わ

薩埵、唐土には慧曠・道宣といひし人、これを重んず。我が

ちよう ちん のうしじゆうごだい しょうむてんのう ぎよう がんじんわじよう しゆう

朝には人皇四十五代聖武天皇の御宇に、鑑真和尚この宗

てんだいしゆう りようしゆう わた とうだいじ かいだん た

と天台宗と両宗を渡して、東大寺の戒壇これを立つ。し

このかたとうせい いた すうちようとしふ そんきひ あら

かしてより已来当世に至るまで、崇重年旧り尊貴日に新た

ごくらくじ りようかんしようにん かみいちにん しもばんみん

なり。なかんずく極楽寺の良観上人は、上一人より下万民

に至るまで、生身の如来とこれを仰ぎ奉る。彼の行儀を

見るに、実にもつてしかなり。飯島の津にて六浦の関米を

取つては諸国の道を作り、七道に木戸をかまえて人別の銭

を取つては諸河に橋を渡す。慈悲は如来に齊しく、徳行は

先達に越えたり。汝、早く生死を離れんと思わば、五戒・

二百五十戒を持ち、慈悲をふかくして物の命を殺さずして、

良観上人のごとく、道を作り橋を渡せ。これ第一の法な

り。汝持たんや否や。

愚人いよいよ掌を合わせて云わく、能く能く持ち奉

おも

らんとおも思う。つぶさにわ我がためにこれを説き給え。そもそ

と たま

ごかい にひやくごじっかい

も、五戒・二百五十戒ということは、我われらぞんちいまだ存知せず。

いさい

しめ たま

委細いさいにこれを示し給え。

ちじんい

なんじ むげ おろ

ごかい にひやくごじっかい

智人云わく、汝は無下に愚かなり。五戒・二百五十戒と

おきなご

知

なんじ

いうことをば、孩児おきなごもこれを知しる。しかれども、汝がため

と

ごかい

いち

ふせつしようかい

に

にこれを説かん。五戒とは、一には不殺生戒、二には

ふちゆうとうかい

さん

ふもうごかい

し

ふじやいんかい

ご

不偷盜戒、三には不妄語戒、四には不邪淫戒、五には

ふおんじゆかい

にひやくごじっかい

おお

不飲酒戒、これなり。二百五十戒のことは多きあいだ、こ

りやく

れを略す。

その時に愚人、礼拝・恭敬して云わく、我、今日より深く

この法を持ち奉るべし。

ここに予が年来の知音、ある所に隠居せる居士一人あり。

予が愁歎を訪わんために来れるが、始めには往事渺茫と

して夢に似たることをかたり、終わりには行く末の冥々と

して弁え難きことを談ず。鬱を散じ思いをのべて後、予に

問うて云わく、そもそも人の世に有る、誰か後生を思わざ

らん。貴辺いかなる仏法をか持って出離をねがい、また亡者

の後世をも訪い給うや。

よこた

い

いちじつ

しょうにんきた

わ

予答えて云わく、一日、ある上人来つて、我がために

ごかい

にひやくごじつかい

さず たま

まこと

しんかん

染

五戒・二百五十戒を授け給えり。実にもつて心肝にそみて

たつと

われふか

りようかんしようにん

およ

み

悪

貴し。我深く良観上人のごとく、及ばぬ身にも、わろき

みち

つく

ふか

かわ

はし

渡

おも

道を作り、深き河には橋をわたさんと思えるなり。

とき

こじしめ

い

なんじ

どうしんたつと

に

おろ

その時、居士示して云わく、汝が道心貴きに似て愚か

いまだん

ほう

あさ

しようじよう

ほう

なり。今談ずるところの法は、浅ましき小乗の法なり。

ほとけ

すなわ

はつしゆ

たと

もう

もんじゆ

じゆうしちしゆ

されば、仏は則ち八種の喩えを設け、文殊はまた十七種

さぶつ

の

ほたるび

にっこう

たと

と

の差別を宣べたり。あるいは螢火・日光の喩えを取り、あ

すいしよう

るり

たと

さんごく

にんし

るいは水精・瑠璃の喩えあり。ここをもつて三国の人師も、

はもんひと

その破文一つにあらず。

つぎ ぎようじや そんなちよう

かなら ひと うやま

ほう

次に行者の尊重のこと、必ず人の敬うによつて法の

たつと

ほとけ

ほう よ

にん よ

貴きにあらず。されば、仏は、「法に依つて人に依らざれ」

さだ たま

われつた

き

じようこ

じりつ

しようじや

ふ

ま

と定め給えり。我伝え聞く、上古の持律の聖者の振る舞い

せつ

い

しゆう

い

ちじよう

ことばあ

こううんかいせつ

は、殺を言い収を言うには知浄の語有り、行雲廻雪には

しし

おも

な

いま

りつそう

ふ

ま

み

死屍の想いを作す。しかるに、今の律僧の振る舞いを見る

ふけん

ざいほう

りせん

か

う

なりわい

に、布絹・財宝をたくわえ、利銭・借り請けを業とす。

きようぎようすで

そうい

たれ

しんじゆ

教行既に相違せり。誰かこれを信受せん。

つぎ みち

つく

はし

わた

かえ

ひと

なげ

いいじま

次に道を作り橋を渡すこと、還つて人の歎きなり。飯島の

つ　むつら　せきまい　と　しよにん　なげ　おお　しよこくしちどう
津にて六浦の関米を取る。諸人の歎きこれ多し。諸国七道の
きど　たびびと　煩　あ　がんぜん
木戸、これも、旅人のわずらい、ただこのことに在り。眼前
の　ことなり。汝見ざるや否や。
なんじみ　いな

ぐにんいろ　な　い　なんじ　ちぶん　しょうにん　ぼう
愚人色を作して云わく、汝が智分をもつて上人を謗じ
たてまつ　ほう　そし　いわ　な　し　い　おろ
奉り、その法を誹ること、謂れ無し。知つて云うか、愚か
にして云うか。おそろし、おそろし。
い　お　い　お

とき　こじわら　い　愚
その時、居士笑つて云わく、ああおろかなり、おろかな
か　しゆう　びやつけん　粗　々　もう　きよう
り。彼の宗の僻見をあらあら申すべし。そもそも教に
だいしようあ　しゆう　ごんじつ　わ　ろくおんせしよう　むかし　けじよう
大小有り、宗に権実を分かてり。鹿苑施小の昔は化城の

と みちび

じゆぶかいけん むしろ

とくやく

戸ぼそに導くとはいえども、鷲峰開頭の筵にはその得益さ

らにこれ無し。

とき ぐにんぼうぜん

こじ と い

もんしよう

その時、愚人茫然として居士に問うて云わく、文証・

げんしようまこと

ほう たも

現証実にもつてしかなり。さて、いかなる法を持つてか

しようじ

はな すみ

じようぶつ

生死を離れ速やかに成仏せんや。

こじしめ

い

われざいぞく

み

ふか

ぶつどう

居士示して云わく、我在俗の身なれども、深く仏道を

しゆぎよう

ようしよう

おお

にんし

ことば

き

きようぎよう

修行して、幼少より多くの人師の語を聞き、ほぼ経教

ひら

み

まつだいわれ

むあくふぞう

をも開き見るに、末代我らがごとくなる無悪不造のために

ねんぶつおうじよう

おし

えしんそうず

そ

は、念仏往生の教えにしくはなし。されば、恵心僧都は「夫

おうじようごくらく

きようぎよう

じよくせまつだい

もくそく

い

れ、往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり」と云い、

ほうねんしようにん

しよきよう

ようもん

あつ

いっこうせんじゆ

ねんぶつ

ひろ

たも

法然上人は諸経の要文を集めて一向専修の念仏を弘め給

なか

みだ

ほんがん

しよぶつちようか

すうちよう

はじ

う。中にも、弥陀の本願は諸仏超過の崇重なり。始め

むさんあくしゆ

がん

お

とくさんほうにん

がん

いた

無三悪趣の願より終わり得三法忍の願に至るまで、いずれ

ひがん

だいじゆうはち

がん

こと

われ

も悲願めでたけれども、第十八の願、殊に我らがために

しゆしよう

じゆうあく

ごぎやく

嫌

いちねん

たねん

殊勝なり。また十悪・五逆をもきらわず、一念・多念を

簡

かみいちにん

しもばんみん

いた

しゆう

もえらばず。されば、上一人より下万民に至るまで、この宗

たも

ほか

こと

おうじよう

ひと

幾

をもてなし給うこと、他に異なり。また往生の人それいく

ばくぞや。

その時とき、愚人ぐにん云いわく、実まことに、小しょうを恥はじて大だいを慕したい浅あさき

を去さつて深ふかきに就つくは、仏教ぶつぎょうの理ことわりのみにあらず、世間せけんに

もこれ法ほうなり。我われ早はやく彼かの宗しゅうにうつらんと思おもう。委細いさいに彼

の旨むねを語かたり給たまえ。彼かの仏ほとけの悲願ひがんの中なかに「五逆ごぎやく・十悪じゅうあくをも簡

ばず」と云いえる五逆ごぎやくとは何なんらぞや、十悪じゅうあくとはいかん。

智人ちじんの云いわく、五逆ごぎやくとは、父ちちを殺ころし、母ははを殺ころし、阿羅漢あらかんを

殺ころし、仏身ぶつしんより血ちを出いだし、和合僧わごうそうを破はす、これを五逆ごぎやくと云

うなり。十悪じゅうあくとは、身みに三みつつ、口くちに四よつつ、意こころに三みつつなり。

身みに三みつつとは殺せつ・盗とう・姪いん、口くちに四よつつとは妄語もうご・綺語きご・悪口あつく・

りようぜつ　こころ　みつ　とん　じん　ち　じゅうあく　い

両舌、意に三つとは貪・瞋・癡、これを十悪と云うなり。

ぐにん　い　われ　いまげ　きよう　たりきおうじよう　たの

愚人云わく、我、今解しぬ。今日よりは他力往生に憑み

か

を懸くべきなり。

ぐにん　い　ほかさか　みつしゆう

ここに愚人また云わく、もつての外盛んにいみじき密宗

ぎようにん　よ　なげ　とごら　らいりん

の行人あり。これも予が歎きを訪わんがために来臨して、

はじめには狂言・綺語のことわりを示し、終わりには顕密

にしゆう　ほうもん　だん　よ　と　い　けんみつ

二宗の法門を談じて、予に問うて云わく、そもそも汝は、

ぶつぽう　しゆぎよう　きようろん　どくじゆ　たてまつ

いかなる仏法をか修行し、いかなる経論をか読誦し奉

よこた　い　われ　いちじつ　こじ　おし

るや。予答えて云わく、我、一日、ある居士の教えによつ

て、浄土の三部経を読み奉り、西方極楽の教主に憑みを
深く懸くるなり。

行者云わく、仏教に二種有り。一には顕教、二には

密教なり。顕教の極理は密教の初門にも及ばず云々。汝

が執心の法を聞けば、釈迦の顕教なり。我が持つところ

の法は、大日覚王の秘法なり。実に三界の火宅を恐れ寂光

の宝台を願わば、すべからく顕教をすてて密教につくべ

し。

愚人驚いて云わく、我いまだ顕密二道ということ聞か

ず。いかなるをけんきよう顯教と云い、いかなるをみつきよう密教と云えるや。

行者云わく、予はこれぎようじゃい頑愚にして、あえてよ賢を存せず。

しかりといえども、今、一・二の文を挙げて汝がいま いち に もん あ なんじ もうまい かか矇昧を挑

げん。顯教とは、舍利弗等の請いによつてけんきよう応身如来の説き

給う諸教なり。密教とは、自受法樂のために、たも しよきよう みつきよう じじゆほうらく ほっしん法身

大日如来のだいにちによらい こんごうさつた しよけ と たも金剛薩埵を所化として説き給うところの

大日經等の三部なり。

愚人云わく、ぐにんい まこと実にもつてせんぴかなり。先非をひるがえして、

賢き教えに付きかしこ おし っ たてまつ おも奉らんとおも思うなり。

うきくさ

しよしゅう

めぐ

よもぎ

けんけん

またここに、萍のごとく諸州を回り、蓬のごとく県々

てん

ひにん

し

きた

もん

はしら

よ

た

に転ずる非人の、それとも知らず来り、門の柱に寄り立つ

ほくそえ

かた

と

て含笑み、語ることなし。あやしみをなしてこれを問うに、

はじ

い

のち

し

と

た

とき

かれ

い

始めには云うことなし。後に強いて問いを立つる時、彼が云

つきそうそう

かぜぼうぼう

なりかたちつね

こと

げんご

わく「月蒼々として風忙々たり」と。形質常に異に、言語

つう

しごく

たず

とうせい

ぜんぼう

よ

また通ぜず。その至極を尋ぬれば、当世の禅法これなり。予、

か ひと

あ さま

み

げんご

き

ぶつどう

ろういん

と

彼の人の有り様を見、その言語を聞いて仏道の良因を問う

とき ひにん

しゆたら

おし

つき

ゆび

きやうもう

時、非人云わく、修多羅の教えは月をさす指、教網はこれ

げんご

滞

もうじ

わ

こころ

ほんぶん

落

着

言語にとどこおる妄事なり。我が心の本分におちつかんと

出で立つ法は、その名を禪と云うなり。

ぐにんい

ねが

われき

おも

愚人云わく、願わくは、我聞かんと思う。

ひにんい

まこと

こころざしふか

かべ

む

ぎぜん

非人云わく、実にその志深くば、壁に向かい坐禅し

ほんしん

つき

す

さいてん

て、本心の月を澄ましめよ。ここをもつて、西天には

にじゅうはつそけいみだ

とうど

ろくそ

そうでんめいはく

なんじ

二十八祖系乱れず、東土には六祖の相伝明白なり。汝これ

さと

きようもう

ふびん

ふびん

ぜしんそくぶつ

そくしん

を悟らずして教網にかかる。不便、不便。「是心即仏、即心

ぜぶつ

み

ほか

ほとけ

是仏」なれば、この身の外に、さらにいづくにか仏あらん

や。

ぐにん

ことば

き

しよほう

かん

しず

ぎり

愚人この語を聞いてつくづく諸法を觀じ、閑かに義理

を案じて云わく、あん い 仏教万差にして、ぶつきょうばんさ 理非明らめ難し。り ひあき がた むべ 宜な

るかな、常啼は東に請い、じょうたい ひがし こ 善財は南に求め、ぜんざい みなみ もと 薬王は臂を

やぎょうぼう 焼き、かわ は 楽法は皮を剥ぐ。善知識実ぜんちしきまこと あ に値い難し。あるいは

教内と談じ、あるいは教外と云う。きょうない だん きょうげ い このことわりを思うに、

いまだ淵底を究めず法水に臨む者は深淵の思いを懐き、えんてい きわ ほっすい のぞ もの しんえん おも いた にんし 人師

を見る族は薄氷の心を成せり。み やから はくひょう こころ な ここをもつて金言には、きんげん

「法に依つて人に依らざれ」と定め、ほう よ ひと よ また爪上の土の譬えさだ

あり。もし仏法の真偽をしる人あらば、ぶつぼう しんい 知 ひと 尋ねて師とすべし。たず し

求めて崇むべし。もとめ あが

そ になかい しょう う てんじょう いと 譬 ぶつぼう

夫れ、人界に生を受くるを天上の糸にたとえ、仏法の

しちよう う ぎ あな たぐ み かる ほう おも

視聴は浮き木の穴に類いせり。身を軽くして法を重くすべ

おも しゆせん よ なげ ひ しよじ めぐ

しと思うによつて衆山に攀じ、歎きに引かれて諸寺を回る。

あし まか ひと がんくつ いた しりえ せいざんがが

足に任せて一つの巖窟に至るに、後には青山峨々として

しようふうじようらくがじよう そう さき へきすいしようじよう きし打 なみ

松風常楽我浄を奏し、前には碧水湯々として岸うつ波

しとくは らみつ ひび しんこく かいふ はな ちゆうどうじつそう いろ

四徳波羅蜜を響かす。深谷に開敷せる花も中道実相の色を

あらわ こうや ほころ うめ かいによさんぜん かお そ

顕し、広野に綻ぶる梅も界如三千の薫りを添う。

ごんごどうだん しんぎようしよめつ い しょうざん しこく しよご

言語道断・心行所滅せり。謂いつべし、商山の四皓の所居

し こぶつきようぎよう あと けいうんあした た

とも。また知らず、古仏経行の迹なるか。景雲朝に立ち、

れいこうゆう

げん

こころ

はか

ことば

霊光夕べに現げんず。ああ、心をもつて計はかるべからず、詞ことばを

の

よ

みぎり

ちんぎん

衍

ほうこう

もつて宣ぶべからず。予この砌よに沈吟みぎりとさまよい、彷徨ちんぎんと

立回

しい

侍

ところ

こつねん

ひと

たちもとおり、徒倚しいとたたずむ。この処侍に忽然ところとして一こつねんり

ほつけどくじゆ

こえふか

しんかん

の聖人しょうにん坐す。その行儀ぎようぎを拝はいすれば、法華読誦ほつげどくじゆの声深こえふかく心肝しんかん

そ

かんそう

と

うかが

げんぎ

とこ

ひじ

腐

に染そみて、閑窓かんそうの戸とぼそを伺うかがえば、玄義げんぎの牀とこに臂ひじをくたす。

しょうにん

よ

ぐほう

こころざし

く

し

ことば

やわ

ここに聖人しょうにん、予が求法よの志ぐほうを酌こころざしみ知くつて詞しを和ことばらげ、

よ

と

なんじ

しんせん

いわや

いた

予よに問とうて云いわく、汝なんじなんじによつて、この深山しんせんの窟いわやに至いたれ

るや。

よこた

い

しょう

軽

ほう

重

もの

予よこた答いえて云いわく、生しょうを軽かるくして法ほうを重おもくする者ものなり。

しょうにんと

ぎょうほう

聖人問うて云わく、その行法いかん。

よこた

い

もと

われ

ぞくじん

まじ

しゅつり

予答えて云わく、本より我は、俗塵に交わっていまだ出離

わきま

ぜんちしき

あ

はじ

りつ

つぎ

を弁えず。たまたま善知識に値って、始めには律、次には

ねんぶつ

しんごん

ぜん

き

念仏・真言ならびに禅、これらを聞くといいども、いまだ

しんぎ

わきま

真偽を弁えず。

しょうにん

なんじ

ことば

き

まこと

聖人云わく、汝が詞を聞くに、実にもつてしかなり。

み

軽

ほう

重

せんしょう

おし

よ

そん

身をかるくして法をおもくするは先聖の教え、予が存する

かみ

ひそう

くも

うえ

しも

ならく

そこ

ところなり。そもそも上は非想の雲の上、下は那落の底ま

しょう

う

し

免

もの

でも、生を受けて死をまぬかるる者やはある。しかれば、

げてん 卑

教

あした

こうがんあ

せろ

ほこ

外典のいやしきおしえにも「朝に紅顔有つて世路に誇ると

ゆう

はっこう

こうげん

く

い

うんじよう

も、夕べには白骨となつて郊原に朽ちぬ」と云えり。雲上

まじ

くも

鬢

鮮

ゆき

袂

に交わつて、雲のびんずらあざやかに、雪のたもとを

翻

たの

思

ゆめ

なか

ゆめ

ひるがえすとも、その楽しみをおもえば、夢の中の夢なり。

やま

麓

よもぎ

終

すみか

たま

うてな

にしき

とばり

山のふもと、蓬がもとはついの栖なり。玉の台、錦の帳

ごせ

どう

何

おののこまち

そとおりひめ

はな

すがた

も、後世の道にはなにかせん。小野小町・衣通姫が花の姿

むじよう

かせ

散

はんかい

ちようりよう

ぶげい

たつ

ごくそつ

つえ

も無常の風にちり、樊噲・張良が武芸に達せしも獄卒の杖

ふじろ

こじん

い

をかなしむ。されば、心ありし古人の云わく「あわれなり

とり辺

やま

ゆうけむり

送

ひと

留

すえ

露

鳥べの山の夕煙おくる人としてとまるべきかは。「末のつゆ

もと 滴 よ なか 後 先 立 例

本のしづくや世の中のおくれさきだつためしなるらん。

せんぼうこうめつ ことわり はじ おどろ ねご ねが

先亡後滅の理、始めて驚くべきにあらず。願うても願う

ぶつどう もと もと きようぎよう なんじ

べきは仏道、求めても求むべきは経教なり。そもそも、汝

い ほうもん しょうじよう

が云うところの法門をきけば、あるいは小乗、あるいは

だいじよう くらい こうげ お かえ あくどう ごう

大乘、位の高下はしばらくこれを置く、還つて悪道の業た

るべし。

ぐにん おどろ い によらいちだい しょうぎよう

ここに、愚人、驚いて云わく、如来一代の聖教はいず

しゅじよう り はじ しちしよはちえ むしろ お

れも衆生を利せんがためなり。始め七処八会の筵より終

ばつだいが ぎしき しゃくそん しょせつ

わり跋提河の儀式まで、いずれか釈尊の所説ならざる。た

とい一分の勝劣をば判ずとも、何ぞ悪道の因と云うべきや。
いちぶん しょうれつ ほん なん あくどう いん い

聖人云わく、如来一代の聖教に、権有り実有り、大有
しょうにんい によらいいちだい しょうぎよう こんあ じつあ だいあ

り小有り、また顕密二道相分かち、その品一つにあらず。
しょうあ けんみつにどうあいわ しなひと

すべからく、その大途を示して汝が迷いを悟らしめん。
だいと しめ なんじ まよ さと

夫れ、三界の教主・釈尊は、十九歳にして伽耶城を出で
そ さんがい きょうしゆ しゃくそん じゅうくさい がやじよう い

て、檀特山に籠もつて難行苦行し、三十成道の刻みに
だんどくせん こ なんぎようくぎよう さんじゅうじようどう きぎ

三惑頓に破し、無明の大夜ここに明けしかば、すべからく
さんわくとみ は むみよう だいや あ

本願に任せて一乗妙法蓮華経を宣ぶべしといえども、
ほんがん まか いちじようみようほうれんげきよう の

機縁万差にしてその機仏乘に堪えず。しかれば、四十余年
きえんばんさ きぶつじよう た しじゅうよねん

しよひ きえん ととの のちはちかねん いた しゆつせ ほんかい
に所被の機縁を調べて、後八箇年に至つて出世の本懐たる
みようほうれんげきよう と たま
妙法蓮華経を説き給えり。

ほとけ おんとししちじゆうにさい じよぶん むりようぎきよう
しかれば、仏の御年七十二歳にして、序分の無量義経に

と さだ のたま われ さき どうじようぼだいじゆ もと たんざ
説き定めて云わく「我は先に道場菩提樹の下に端坐する

ろくねん あのかたらさんみやくさんぼだい じよう え
こと六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得た

ふつげん いっさい しょうほう かん せんぜつ
り。仏眼をもつて一切の諸法を觀ずるに、宣説すべからず。

ゆえん もろもろ しゆじよう しょうよく ふどう し
所以はいかん。諸の衆生の性欲の異なることを知れ

しょうよく ふどう しゆじゆ ほう と しゆじゆ ほう
ばなり。性欲は不同なれば、種々に法を説きき。種々に法

と ほうべんりき しじゆうよねん しんじつ
を説くことは、方便力をもつてす。四十余年にはいまだ真実

をあらわ 顕もんさもんずこころ「文。この文の意は、仏の御年三十にして寂滅じやくめつ どうじようぼだいじゆ もと む ぶつげん いつさいしゆじよう こころね

道場菩提樹の下に坐して、ぶつげん 仏眼をもつて一切衆生の心根 いっさいしゆじよう こころね

を御覧ごらんずるに、衆生成仏の直道たる法華経をば説くべか しゆじようじようぶつ じきどう ほけきよう と

らず。ここをもつて、空拳くうけんを挙げて嬰兒えいじをすかすがごとく、あ えいじ 賺

様々のたばかりをもつて、四十余年が間はしじゆうよねん 間はいまだ真実を あいだ しんじつ

顕あらわさねんきずと年紀をさして、青天せいてんに日輪にちりんの出で暗夜いに満月まんげつのか たま

かるがごとく説き定めさせ給たまえり。

この文を見て、何ぞ、同じ信心をもつて、もん み なん おな しんじん ほとけ そらごと と 仏の虚事と説

かるる法華已前の権教に執著しゆじやくして、めずらしからぬ三界さんがい 珍

の故宅こたくに帰るべきや。されば、法華經ほけきょうの一の卷いちの方便品かん ほうべんに云い

わく「正直しょうじきに方便ほうべんを捨てて、ただ無上道むじょうどうを説くのみ」文もん。

この文の意もんは、前四十二年こころの経々さきしじゅうにねん、汝きようぎようが語るところなんじの

念仏ねんぶつ・真言しんごん・禅ぜん・律りつを正直しょうじきに捨てよとなり。この文明白もんめいはくな

る上うえ、重ねかさていましめて、第二だいにの卷かんの譬喩品ひゆほんに云いわく「た

だ楽ねがつて大乘だいじようきようてん經典じゆじを受持ないしするのみにして、乃至よきよう、余經いの

一偈いちげをも受けもんざれ」文こころ。この文の意ねんきは、年紀わづらかれこれ煩わ

し、詮せんずるところほけきよう、法華經じよより自余きようの経いちげをば一偈うをも受う

べからずとなり。しかるに、八宗はっしゆうの異義い蘭菊らんぎくに、道俗どうぞく形かたちを

異にすれども、一同に法華經をば崇むる由を云う。されば、

これらの文をばいかが弁えたる。正直に捨てよと云つて

余經の一偈をも禁むるに、あるいは念仏、あるいは真言、

あるいは禅、あるいは律、これ余經にあらずや。

今この妙法蓮華經とは、諸仏出世の本意、衆生成仏の

直道なり。されば、釈尊は付囑を宣べ、多宝は証明を遂

げ、諸仏は舌相を梵天に付けて「皆これ眞実なり」と宣べ給

えり。この經は、一字も諸仏の本懐、一点も多生の助けな

り。一言一語も虚妄あるべからず。この經の禁めを用い

もの しよぶつ した けんしよう ひとり
ざる者は、諸仏の舌をきり、賢聖をあざむく人にあらずや。

つみまこと おそ に かん い ひとしん
その罪実に怖るべし。されば、二の巻に云わく「もし人信

きよう きぼう すなわ いつさいせけん ぶつしゆ だん
ぜずして、この経を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜ

もん もん こころ ひと きよう いちげい つ そむ
ん」文。この文の意は、もし人この経の一偈一句をも背か

ひと か こ げんざい みらい さんぜじつぼう ほとけ ころ つみ さだ
ん人は、過去・現在・未来、三世十方の仏を殺さん罪と定

きようぎよう かがみ とうせい 当 見 ほけきよう 背
む。経教の鏡をもつて当世にあてみるに、法華経をそむ

ひと まこと あ
かぬ人は実にもつて有りがたし。

こと こころ あん ふしん ひと むけん まぬか
事の心を案ずるに、不信の人なお無間を免れず。いわ

ねんぶつ そし ほうねんしようにん ほけきよう ねんぶつ たい
んや、念仏の祖師・法然上人は、法華経をもつて念仏に対

なげう

うんぬん

ごせん

しちせん

きようぎよう

して「**抛てよ**」と云々。五千・七千の経教に、いずれの

ところ

ほけきよう

なげう

いもん

さんまいほつとく

処にか**法華経**を抛てよと云う文ありや。三昧発得の

ぎようじや

しようじん

みだぶつ

崇

ぜんどうおしよう

ごしめ

ぞうぎよう

行者・生身の**弥陀**仏とあがむる**善導**和尚、五種の**雑行**を

た

ほけきよう

せん

なか

ひと

な

せんになたも

立てて、**法華経**をば「千の中に一りも無し」とて千人持つ

いちにん

ほとけ 成

た

きようもん

とも一人も仏になるべからずと立てたり。経文には、「も

ほう

き

むん

じようぶつ

し法を聞くことあらば、一りとして**成仏**せざることなけん」

だん

きよう

き

じっかい

えしよう

みなぶつどう

じよう

と談じて、この**経**を聞けば、十界の**依正**、皆**仏道**を成ず

み

ぎやく

じようだつ

てんのうによらい

きべつ

と見えたり。ここをもつて、五逆の**調達**は**天王如来**の**記別**

あず

ひき

ごしよう

りゆうによ

なんぼう

とんがくじようどう

とな

に予かり、**非器**・**五障**の**竜女**も南方に頓覺**成道**を唱う。

いわんやまた、きつこう 蝮蛇の六即を立てて機を漏らすことなし。ろくそく た き も

ぜんどう 善導の言と法華經の文と、まこと 実にもつて天地雲泥せり。てんちうんदै

善導の言と法華經の文と、まこと 実にもつて天地雲泥せり。い

っ

どおり

おも

しよぶつ

ずれに付くべきや。なかんずくその道理を思うに、諸仏・

しゆきよう

おんてき

しようそう

しゆにん

しゆうてき

きようもん

衆經の怨敵、聖僧・衆人の讐敵なり。經文のごとくな

むけん

まぬか

らば、いかでか無間を免るべきや。

ぐにんいろ

な

い

なんじいや

み

ここに愚人色を作して云わく、汝賤しき身をもつてほし

ゆうげん

は

さと

い

まよ

い

りひわきま

いままに莠言を吐く。悟つて言うか、迷つて言うか、理非弁

がた

かたじけな

ぜんどうおしよう

み

だぜんぜい

おうけ

え難し。忝くも善導和尚は弥陀善逝の応化、あるいは

せいしほさつ

けしん

い

ほうねんしようにん

ぜんどう

勢至菩薩の化身と云えり。法然上人もまたしかなり。善導

ごしん

じょうこ

せんだつ

うえ

ぎょうとくしゅはつ

げりようそこ

の後身といえり。上古の先達たる上、行徳秀発し、解了底

きわ

なん

あくどう

お

たも

い

を極めたり。何ぞ悪道に堕ち給うと云うや。

しょうにんい

なんじ

ことば

よ

あお

しん

と

聖人云わく、汝が言しかなり。予も仰いで信を取るこ

ぶつぽう

ひと

きせん

と、かくのごとし。ただし、仏法はあながちに人の貴賤には

よ

きようもん

さき

み

いや

依るべからず、ただ経文を先とすべし。身の賤しきをもつ

ほう かる

うにんぎようししようおしよう

うにんぎようし

て、その法を軽んずることなかれ。「有人楽生悪死。有人楽死

おしよう

ひとあ

しよう

ねが

し

にく

ひとあ

し

ねが

しよう

悪生（人有つて生を楽い死を悪む。人有つて死を楽い生を

にく

じゅうにじ

とな

び まだいこく

きつね

たいしやく

し

あが

悪む」の十二字を唱えし毘摩大国の狐は、帝釈の師と崇

しよぎようむじよう

とう

じゅうろくじ

だん

きじん

せつせんどうじ

められ、「諸行無常」等の十六字を談ぜし鬼神は、雪山童子

たつと

かなら

きじん

たつと

ほう

に貴まる。これ必ず狐と鬼神との貴きにあらず。ただ法

おも

ゆえ

を重んずる故なり。

われ

じぶ

きようしゆしやくそん

そうりんさいご

ごゆいごん

されば、我らが慈父・教主釈尊、双林最後の御遺言・

ねはんぎよう

だいろうく

ほう

よ

にん

よ

ふげん

涅槃經の第六には、「法に依つて人に依らざれ」とて、普賢・

もんじゆとう

とうがくいげん

だいさつた

ほうもん

と

たも

きようもん

文殊等の等覚已還の大薩埵、法門を説き給うとも、經文を

て

もち

てんだいだいしい

しゆたら

あ

手に把らずば用いざれとなり。天台大師云わく「修多羅と合

ろく

もち

もんな

ぎな

しんじゆ

わば、録してこれを用いる。文無く義無ければ信受すべか

もん

しやく

こころ

きようもん

あき

もち

もんしよう

らず」文。釈の意は、經文に明らかならんを用いよ、文証

な

す

でんぎようだいしい

ぶっせつ

えびよう

無からんをば捨てよとなり。伝教大師云わく「仏説に依憑せ

くでん しん

もん さき しやく どうい

りゆうじゆ

よ。口伝を信ずることなかれ」文。前の釈と同意なり。竜樹

ぼさつ い

しゆたら よ

びやくろん

しゆたら よ

菩薩云わく「修多羅に依るは白論なり。修多羅に依らざる

こくろん

もん

こころ

きよう

なか

ほつけいぜん

ごんきよう

捨

は黒論なり」文。意は、経の中にも法華已前の権教をす

きよう

付

きようもん

ろんもん

ほつけ

たい

ててこの経につけよとなり。経文にも論文にも、法華に対

しよよ

きようてん

す

い

ふんみよう

して諸余の經典を捨てよと云うこと分明なり。しかるに、

かいげん

ろく

あ

ごせん

しちせん

きようがん

ほけきよう

開元の録に挙ぐるところの五千・七千の経巻に、「法華経を

す

ないしなげう

きら

ぞうぎよう

おさ

捨てよ、乃至抛てよ」と嫌うことも、また雑行に摂めて

す

い

きようもん

まった

な

たし

「これを捨てよ」と云う経文も全く無し。されば、慥か

きようもん

かんが

い

ぜんどう

ほうねん

むけん

く

すく

の経文を勘え出だして、善導・法然の無間の苦を救わる

べし。

いま よ ねんぶつ ぎょうじや ぞくなん ぞくによ きょうもん い

今の世の念仏の行者、俗男・俗女、経文に違するのみ

し おし そむ

ならず、また師の教えにも背けり。

ごしゆ ぞうぎよう ねんぶつもう ひと 捨 につき ぜんどう

五種の雑行とて念仏申さん人のすつべき日記、善導の

しゃく あ ぞうぎよう せんちやく い だいいち ぞくじゆ

釈これ有り。その雑行とは、選択に云わく「第一に読誦

ぞうぎよう かみ かんぎようとう おうじようじようど きよう のぞ

雑行とは、上の観経等の往生浄土の経を除いてより

いげ だいししようじよう けんみつ しよきよう じゆじ ぞくじゆ

已外、大小乗・顕密の諸経において受持・読誦するを、

ぞくじゆぞうぎよう な ないしだいさん らいはいぞうぎよう

ことごとく読誦雑行と名づく乃至第三に礼拝雑行とは、

かみ みだ らいはい のぞ いげ いっさい しよよ ぶつ

上の弥陀を礼拝するを除いてより已外、一切の諸余の仏

ぼさつとう

もろもろ

せてん

らいはい

くぎよう

菩薩等および諸の世天において礼拝・恭敬するを、こと

らいはいぞうぎよう

な

だいし

しょうみようぞうぎよう

かみ

ごとく礼拝雑行と名づく。第四に称名雑行とは、上の

みだ

みようごう

とな

のぞ

いげ

じよ

いっさい

ぶつ

弥陀の名号を称うるを除いてより已外、自余の一切の仏

ぼさつとう

もろもろ

せてんとう

みようごう

とな

菩薩等および諸の世天等の名号を称うるを、ことごとく

しょうみようぞうぎよう

な

だいご

さんだんくようぞうぎよう

かみ

称名雑行と名づく。第五に讚歎供養雑行とは、上の

みだぶつ

のぞ

いげ

いっさい

しよよ

ぶつぼさつとう

弥陀仏を除いてより已外、一切の諸余の仏菩薩等および

もろもろ

せてんとう

さんだん

くよう

さんだん

諸の世天等において讚歎・供養するを、ことごとく讚歎

くようぞうぎよう

な

もん

供養雑行と名づく」文。

しゃく

こころ

だいいち

どくじゆぞうぎよう

ねんぶつもう

この釈の意は、第一の読誦雑行とは、念仏申さん

どうぞく なんによ よ きょう きょう きょう さだ

道俗・男女、読むべき経あり、読むまじき経ありと定め

よ きょう ほけきょう にんのうきょう やくしきょう だいじつきょう

たり。読むまじき経は、法華経・仁王経・薬師経・大集経・

はんによしんきょう てんによじょうぶつきょう ほくとじゆみようきょう 打 まか

般若心経・転女成仏経・北斗寿命経、ことさらうち任せ

しよにんよ はちかん うち かのんぎょう しよきょう いっく

て諸人読まるる八巻の中の観音経、これらの諸経を一句

いちげ よ ねんぶつ こころぎ きょうじや

一偈も読むならば、たとい念仏を志す行者なりとも、

ぞうぎよう おさ おうじよう うんぬん よ ぐげん

雑行に摂められて往生すべからず云々。予、愚眼をもつ

よ み ねんぶつもう ひと きょうぎよう よ

て世を見るに、たとい念仏申す人なれども、この経々を讀

ひと おお していてきたい しちぎやくぎい な

む人は、多く師弟敵対して七逆罪と成りぬ。

だいさん らいはいぞうぎよう ねんぶつ きょうじや み ださんぞん

また第三の礼拝雑行とは、念仏の行者は弥陀三尊より

ほか かみ あ しょうぶつぼさつ しょうてんぜんじん らい

外は、上に挙ぐるところの諸仏菩薩・諸天善神を礼するを

らいはいぞうぎよう な きん

ば、礼拝雑行と名づけ、またこれを禁ず。しかるを、日本

しんこく いざなぎ いざなみ みこと くに つく てんしやうだいじん

は神国として伊弉諾・伊弉冉の尊この国を作り、天照太神

すいじやく おおわ みもすそがわ なが ひさ いま 絶

垂迹し御坐しまして、御裳濯河の流れ久しくして今にたえ

くに しょう う じゃぎもち

ず。あに、この国に生を受けてこの邪義を用ゆべきや。ま

ふてん もと う さんこう おん こうむ まこと

た普天の下に生まれて三光の恩を蒙りながら、誠に

にちがつ しょうしゆく は

日月・星宿を破すること、もつとも恐れ有り。

だいし しょうみやうぞうぎよう ねんぶつもう ひと とな

また第四の称名雑行とは、念仏申さん人は、唱うべき

ぶつぼさつ な とな ぶつぼさつ みな とな ぶつ

仏菩薩の名あり、唱うまじき仏菩薩の名あり。唱うべき仏

ぼさつ みな み だ さん ぞん み よう ごう とな ぶつ ぼさつ み よう ごう

菩薩の名とは、弥陀三尊の名号、唱うまじき仏菩薩の名号

しゃか やくし だいにちとう しよぶつ じぞう ふげん もんじゆ にちがつしよ

とは、釈迦・薬師・大日等の諸仏、地藏・普賢・文殊・日月星、

にしよ みしま くまの はぐる てんしようだいじん はちまんだいぼさつ

二所と三島と熊野と羽黒と天照太神と八幡大菩薩と、これ

みな いっぺん とな ひと ねんぶつ じゆうまんべん ひやくまんべんもう

らの名を一遍も唱えん人は、念仏を十万遍・百万遍申し

ぶつ ぼさつ にちがつじんとう みな とな とが

たりとも、この仏菩薩・日月神等の名を唱うる過によつて、

むけん 墮 おうじよ うんぬん われせけん み

無間にはおつとも、往生すべからずと云々。我世間を見る

ねんぶつ もう ひと しよぶつ ぼさつ しよてんぜんじん みな とな

に、念仏を申す人も、これらの諸仏菩薩・諸天善神の名を唱

ゆえ し おし そむ

うる故に、これまた師の教えに背けり。

だいご さんだんく ようぞうぎ ねんぶつ もう ひと く よう

第五の讚歎供養雜行とは、念仏申さん人は、供養すべき

ほとけ みださんぞん くよう ほか かみ あ ぶつ

仏は弥陀三尊を供養せん外は、上に挙ぐるところの仏

ぼさつ しよてんぜんじん こうげ 少 くよう ひと ねんぶつ く

菩薩・諸天善神に香華のすこしをも供養せん人は、念仏の功

たつと とが ぞうぎよう せつ 嫌

は貴けれどもこの過によつて雑行に撰すとこれをきらう。

よ み しゃだん もう へいはく ささ どうしや

しかるに、世を見るに、社壇に詣でては幣帛を捧げ、堂舎に

のぞ らいはい いた し おし そむ なんじ

臨んでは礼拝を致す。これまた師の教えに背けり。汝もし

ふしん せんちやく み もんめいはく

不審ならば、選択を見よ。その文明白なり。

ぜんどうおしよう かんねんほうもんぎよう い しゆにくごしん ちか

また善導和尚、観念法門経に云わく「酒肉五辛、誓つて

ほつがん て と くち は ことば い

発願して手に捉らざれ、口に喫まざれ。もしこの語に違せ

すなわ しん く あくそう つ がん もん もん

ば、即ち身・口ともに悪瘡を着けんと願ぜよ」文。この文

の意は、念仏申さん男・女・尼・法師は、酒を飲まざれ、

魚鳥を食わざれ、その外にら・ひる等の五つのからくくさ

き物を食わざれ、これを持たざる念仏者は、今生には悪瘡

身に出で、後生には無間に墮つべしと云々。しかるに、念仏

申す男・女・尼・法師、この誠めをかえりみず、ほしいま

まに酒をのみ、魚鳥を食らうこと、劍を飲む譬えにあら

ずや。

ここに愚人云わく、誠にこれこの法門を聞くに、念仏の

法門実に往生すといえども、その行儀、修行し難し。い

わんや、彼の憑むところの経論は、皆もつて権説なり。

おうじよう か たの きようろん みな ごんせつ じよう ふんみよう しんごん は

往生すべからざるの条、分明なり。ただし、真言を破す

いわ な そ だいにちきよう だいにちかくおう ひほう

ることは、その謂れ無し。夫れ、大日経とは大日覚王の秘法

だいにちによらい けい みだ ぜんむい ふくう つた

なり。大日如来より系も乱れず善無畏・不空これを伝え、

こうぼうだいし にほん りようかい まんだら ひろ そんなさんじゆうしちそん

弘法大師は日本に両界の曼陀羅を弘め、尊高三十七尊、

ひおう けんきよう ごくり みつきよう

秘奥なるものなり。しかるに、顕教の極理は、なお密教の

しよもん およ ごとういん ほつけ およ

初門にも及ばず。ここをもつて、後唐院は「法華すらなお及

じよ おし しゃく たま

ばず。いわんや自余の教えをや」と釈し給えり。このこと、

こころ 得

いかんが心うべきや。

しょうにんしめ

い

よ はじ

だいにち

たの

か

聖人示して云わく、予も始めは大日に憑みを懸けて

みつしゅう

こころざし

き

か

しゅう

さいてい

み

密宗に志を寄す。しかれども、彼の宗の最底を見るに、

りゅうぎ

ほうぼう

なんじ

い

こうや

だいし

その立義もまた謗法なり。汝が云うところの高野の大師は、

さがてんのう

ぎよう

にんし

こうてい

ぶつぼう

せんじん

嵯峨天皇の御宇の人師なり。しかるに、皇帝より仏法の浅深

はんしやく

よし

せんじ

たま

じゅうじゅうしんろんじつかん

を判釈すべき由の宣旨を給わつて、十住心論十卷これを

つく

しょうはく

よう

と

さんかん

ちぢ

造る。この書広博なるあいだ、要を取つて三卷にこれを縮め、

な

ひぞうほうやく

ごう

はじ

いしやうていようしん

お

ひみつ

その名を秘蔵宝鑰と号す。始め異生羝羊心より終わり秘密

しょうごんしん

いた

じゅう

ふんべつ

だいはちほつけ

だいくけごん

だいいじゅう

莊嚴心に至るまで十に分別し、第八法華・第九華嚴・第十

しんごん

た

ほつけ

けごん

おと

だいにちきよう

さんじゅう

真言と立てて、「法華は華嚴にも劣れば、大日経には三重

れつ はん

じようじよう

じじよう

ほとけ

みな

の劣」と判じて、「かくのごとき乗々は、自乘に仏の名を

う

のち のぞ

けろん な

か

ほけきよう

得れども、後に望めば戯論と作る」と書いて、法華経を

おうげん

きご

い

しやくそん

むみよう

まよ

ほとけ

くだ

「狂言・綺語」と云い、釈尊をば「無明に迷える仏」と下

でんぼういん

こんりゆう

こうぼう

でし

しようかくぼう

せり。よつて、伝法院を建立せし弘法の弟子・正覚房は

ほけきよう

だいにちきよう

履

取

およ

しやくあぶつ

「法華経は大日経のはきものとりにならず、釈迦仏は

だいにちによらい

うしか

た

か

大日如来の牛飼いにも足らず」と書けり。

なんじ

こころ

しず

き

いちだい

ごせん

しちせん

きようぎよう

げてん

汝、心を静めて聞け。一代の五千・七千の経教、外典

さんぜんよかん

ほけきよう

けろん

さんじゆう

れつ

けこんぎよう

おと

三千余巻にも、「法華経は戯論、三重の劣、華嚴経にも劣り、

しやくそん

むみよう

まよ

ほとけ

だいにちによらい

うしか

た

釈尊は無明に迷える仏にて大日如来の牛飼いにも足らず」

いと云う慥かなる文ありや。たといさる文有りというとも、能く能く思案あるべきか。

経教は西天より東土に泊ぼす時、訳者の意樂に随つて

経論の文不定なり。さて後秦の羅什三蔵は、「我漢土の仏法

を見るに、多く梵本に違せり。我が訳するところの経、も

し誤りなくば、我死して後、身は不浄なれば焼くるとい

とも、舌ばかりは焼けざらん」と常に説法し給いしに、焼

奉る時、御身は皆骨となるといへども、御舌ばかりは

青蓮華の上に光明を放つて日輪を映奪し給いき。有り難

ことなり。さてこそ、ことさら彼の三蔵の訳するところの

ほけきょう

とうど

ひろ

たま

法華経は、唐土にやすやすと弘まらせ給いしか。しかれば、

えんりやくじ

こんぽんだいし

しよしゆう

せ

たま

ほつけ

やく

延暦寺の根本大師、諸宗を責め給いしには、「法華を訳す

さんぞう

した

や

しるし

なんだち

えきよう

みなあやま

る三蔵は舌の焼けざる験あり。汝等が依経は皆誤れり」

は たも

ねはんぎよう

わ

ぶつぼう

たこく

うつ

と破し給うはこれなり。涅槃経にも「我が仏法は他国へ移ら

とき

あやま

おお

と

たま

きようもん

ん時、誤り多かるべし」と説き給えば、経文にたとひ

ほけきょう

しやくそん

むみよう

まよ

ほとけ

「法華経はいたずらごと」、「釈尊をば「無明に迷える仏な

ごんきよう

じつきよう

だいじよう

しろうじよう

せつじ

ぜんご

り」とありとも、権教・実教、大乘・小乗、説時の前後、

やくしや

よ

よ

たず

ろうし

こうし

くしいちげん

訳者、能く能く尋ぬべし。いわゆる、老子・孔子は九思一言・

さんしいちげん

しゅうこうたん

じき

さんどは

ゆあみ

さんど

三思一言、周公旦は食するに三度吐き沐するに三度にぎ

げてん

浅

ないてん

じん

る。外典のあさき、なおかくのごとし。いわんや、内典の深

ぎ なら

ひと

うえ

ぎ

きよろん

あとかた

義を習わん人をや。その上、この義、経論に迹形もなし。

ひと そし

ほう ほう

あくどう

お

こうぼうだいし

「人を毀り、法を謗じては、悪道に墮つべし」とは、弘法大師

しやく

かなら

じごく

お

うたが

の釈なり。必ず地獄に墮ちんこと、疑いなきものなり。

ぐにん

ぼうぜん

惚

こつねん

歎

ひき

ここに愚人、茫然とほれ、忽然となげいて、やや久しゆ

い

だいし

ないげ

みようきよう

しゆにん

どうし

うして云わく、この大師は内外の明鏡、衆人の導師たり。

とくぎようよ

すぐ

めいよ

き

とうど

德行世に勝れ、名誉あまねく聞こえて、あるいは唐土より

さんこ

はちまんより

かいじよう

投

すなわ

にほん

いた

三鈷を八万余里の海上をなぐるに即ち日本に至り、ある

いは心経の旨をつづるに蘇生の族途にイむ。しかれば、
この人ただ人にあらず、大聖権化の垂迹なり。仰いで信を
取らんにはしかじ。

聖人云わく、予も始めはしかなり。ただし、仏道に入つ

て理非を勘え見るに、仏法の邪正は必ず得通自在にはよ

らず。ここをもつて、仏は「法に依つて人に依らざれ」と

定め給えり。前に示すがごとし。彼の阿伽陀仙は恒河を片耳

にたたえて十二年、耆菟仙は一日の中に大海をすいほす。

張階は霧を吐き、欒巴は雲を吐く。しかれども、いまだ仏法

ぜひ し いんが どうり わきま いちよう ほううんほつし
の是非を知らず、因果の道理をも弁えず。異朝の法雲法師

こうきようごんじゆ みぎり しゆゆ てんげ 降
は講經勤修の砌に須臾に天華をふらせしかども、妙樂
みようらく

だいし かんろう
大師は、「感応かくのごときも、なお理に称わず」とて、い

ぶつぼう 知 は たも
まだ仏法をばしらずと破し給う。

そ ほけきよう もう いこんとう さんせつ きら いぜん
夫れ、この法華經と申すは、已今当の三説を嫌つて、已前

きよう しんじつ あらわ う やぶ かた なら
の經をば「いまだ眞実を顕さず」と打ち破り、肩を並ぶ

きよう こんせつ もん 責 いご きよう とうせつ
る經をば「今説」の文をもつてせめ、已後の經をば「当説」

もん やぶ まこと さんせつだいいち きよう
の文をもつて破る。実に三説第一の經なり。

だいし かん い やくおう いまなんじ つ わ と
第四の卷に云わく「薬王よ。今汝に告ぐ。我が説くところ

きようてん

きよう

なか

ほつけ

もつと

だいいち

ろの經典、しかもこの経の中において、法華は最も第一

もん

もん

こころ

りようぜんえじよう

やくおうぼさつ

もう

なり」文。この文の意は、靈山会上に薬王菩薩と申せし

ぼさつ

ほとけつ

のたま

はじ けごん

お

ねはんぎよう

いた

菩薩に仏告げて云わく、始め華嚴より終わり涅槃経に至

むりようむへん

きよう

ごうがしやとう

かずおお

なか

いま

るまで、無量無辺の経、恒河沙等の数多し。その中には今

ほけきようさいだいいち

と

こうぼうだいし

いち

じ

の法華経最第一と説かれたり。しかるを、弘法大師は一の字

さん

よ

どうかん

い

われ

ぶつどう

むりよう

を三と読まれたり。同巻に云わく「我は仏道のために、無量

ど

はじ

いま

いた

ひろ

しよきよう

と

の土において、始めより今に至るまで、広く諸経を説く。

なか

きよう

だいいち

もん

こころ

しかもその中において、この経は第一なり」。この文の意

しやくそんむりよう

こくど

みようじ

か

は、また釈尊無量の国土にして、あるいは名字を替え、あ

ねんき ふどう しゅじゅ かたち あらわ と

るいは年紀を不同になし、種々の形を現して説くところ

しよきよう なか ほけきよう だいいち さだ おな

の諸経の中には、この法華経を第一と定められたり。同じ

だいがい かん もつと かみ あ の だいにちきよう

き第五の巻には「最もその上に在り」と宣べて、大日経・

こんごうちようきようとう むりよう きよう いただき きよう あ と

金剛頂経等の無量の経の頂にこの経は有るべしと説

こうぼうだいし もつと しも あ い

かれたるを、弘法大師は「最もその下に在り」と謂えり。

しやくそん こうぼう ほけきよう ほうやく まこと そうい

釈尊と弘法と、法華経と宝鑰とは、実にもつて相違せ

しやくそん す たてまつ こうぼう つ こうぼう す

り。釈尊を捨て奉つて弘法に付くべきか、また弘法を捨

しやくそん つ たてまつ きようもん そむ にんし

てて釈尊に付き奉るべきか。また経文に背いて人師の

ことば したが にんし ことば す きんげん あお

言に随うべきか、人師の言を捨てて金言を仰ぐべきか、

ようしやこころ あ

用捨心に有るべし。

だいいち かん やくおうほん じゅうゆ あ おし たん

また第七の巻の薬王品に十喩を挙げて教えを歎ずるに、

だいいち みず たと こうが しまきよう たと たいかい ほっけ たと

第一は水の譬えなり。江河を諸経に譬え、大海を法華に譬

だいにちきよう すぐ ほっけ おと

えたり。しかるを、「大日経は勝れたり、法華は劣れり」

い ひと すなわ たいかい しようが 少

と云う人は、即ち「大海は小河よりもすくなし」と云わん

ひと いま よ ひと うみ しまが すぐ

人なり。しかるに、今の世の人は、海の諸河に勝ることを

ほけきよう だいいち わきま

ば知るといへども、法華経の第一なることをば弁えず。

だいに やま たと しゆせん しまきよう たと しゆみせん ほっけ

第二は山の譬えなり。衆山を諸経に譬え、須弥山を法華に

たと しゆみせん じようげじゅうろくまんはっせんゆじゆん やま

譬えたり。須弥山は上下十六万八千由旬の山なり。いずれ

の山か肩を並ぶべき。法華経を「大日経に劣る」と云う人
やま かた なら ほけきよう だいにちきよう おと い ひと

は、「富士山は須弥山より大なり」と云わん人なり。第三は
ふじさん しゆみせん だい い ひと だいさん

星月の譬えなり。諸経を星に譬え、法華経を月に譬う。月
せいげつ たと しよきよう ほし たと ほけきよう つき たと つき

と星とはいずれ勝りたりと思えるや。乃至、次下には、「こ
ほし まさ おも ないし つぎしも

の経もまたかくのごとく、一切の如来の所説、もしは菩薩
きよう いっさい によらい しよせつ ぼさつ

の所説、もしは声聞の所説、諸の経法の中に、最もこ
しよせつ しようもん しよせつ もろもろ きようぼう なか もつと

れ第一なり」とて、この法華経はただ釈尊一代の第一と説
だいいち ほけきよう しゃくそんいちだい だいいち と

き給うのみにあらず、大日および薬師・阿弥陀等の諸仏、普
たも だいにち やくし あみだとう しよぶつ ふ

賢・文殊等の菩薩の一切の説くところの諸経の中に、この
げん もんじゆとう ぼさつ いっさい と しよきよう なか

ほけきょうだいいち と

きょう まさ

い

法華経第一と説けり。されば、もしこの経に勝りたりと云

きょうあ

げどう

てんま

せつ

し

う経有らば、外道・天魔の説と知るべきなり。

うえ

だいにちによらい

くおんじつじょう

きょうしゆしやくそん

その上、大日如来というは、久遠実成の教主釈尊、

しじゅうにねんわこうどうじん

き

おう

とき

さんじんそくいち

によらい

四十二年和光同塵してその機に応ずる時、三身即一の如来

びるしやな しめ

ゆえ

かいけんじつそう

まえ

しばらく毘盧遮那と示せり。この故に、開顕実相の前には、

しやか

おうけ

み

ふげんきょう

しやかむ

釈迦の応化と見えたり。ここをもつて普賢経には「釈迦牟

にぶつ

びるしやなへんいつさいしよ

な

ほとけ

尼仏は、毘盧遮那遍一切処と名づけたてまつる。その仏の

じゅうしよ

じょうじやつこう

な

と

いま

ほけきょう

じっかい

住処は、常寂光と名づく」と説けり。今、法華経は、十界

ごご

いちねんさんぜん

さんたいそくぜ

しどふに

だん

うえ

いちだい

互具・一念三千・三諦即是・四土不二と談ず。その上に一代

しょうぎよう

こつずい

にじようさぶつ

くおんじつじよう

こんきよう

かぎ

なんじ

聖教の骨髓たる二乗作仏・久遠実成は今経に限り。汝

かた

だいにちきよう

こんごうちようきようとう

さんぶ

ひきよう

語るところの大日経・金剛頂経等の三部の秘経にこれら

だいじ

ぜんむい

ふくうとう

だいじ

ほうもん

ぬす

の大事ありや。善無畏・不空等、これらの大事の法門を盗み

と

おの

きよう

がんもく

ほんきよう

ほんろん

あとかた

取つて、己が経の眼目とせり。本経・本論には迹形もな

おうわく

いそ

いそ

あらた

き誑惑なり。急ぎ急ぎこれを改むべし。

だいにちきよう

しきようごんぞう

じんぎようじゆかいとう

あ

そもそも大日経とは、四教含蔵して尽形寿戒等を明か

とうど

にんし

てんだいしよりゆう

だいさんじ

ほうどうぶ

きよう

せり。唐土の人師は天台所立の第三時・方等部の経なり

さだ

ごんきよう

浅

なんじ

まこと

どうしん

と定めたる権教なり。あさまし、あさまし。汝、実に道心

いそ

せんぴ

く

そ

おも

あらば、急いで先非を悔ゆべし。夫れ以んみれば、この

みょうほうれんげきょう いちだい かんもん いちねん 統 じつかい えしやう さんぜん
妙法蓮華經は一代の觀門を一念にすべ、十界の依正を三千
縮
につづめたり。

しょうぐもんどうしやうげ
聖愚問答抄下

ぐにん やわ い きやうもん みやうきやう
ここに愚人いささか和らいで云わく、經文は明鏡なり、
ぎりよ 致 およ ほけきやう さんせつ ひい いちだい
疑慮をいたすに及ばず。ただし、法華經は三説に秀で一代に
こ 超ゆるといえども、言説に拘らず經文に留まらざる我ら
ごんせつ かかわ きやうもん とど われ

こころ ほんぶん ぜん いっぽう

ばんぼう

が心の本分の禅の一法にはしくべからず。およそ万法を

ほっけん

ごんご

およ

ぜんほう

な

弘遣して言語の及ばざるところを、禅法とは名づけたり。

ばつたいが

ほとり

しゃらりん

もと

しゃくそん

きんかん

されば、跋提河の辺、沙羅林の下にして、釈尊、金棺よ

みあし

い

ねんげみしよう

ほうもん

かしよう

ふぞく

り御足を出だし拈華微笑して、この法門を迦葉に付嘱あり

このかた

てんじくにじゅうはつそけいみだ

とうど

ろくそしだい

しより已来、天竺二十八祖系乱れず、唐土には六祖次第に弘

つう

だるま

さいてん

にじゅうはつそ

お

とうど

通せり。達磨は西天にしては二十八祖の終わり、東土にし

ろくそ

はじ

そうでん

きようもう

とどこお

ては六祖の始めなり。相伝をうしなわず、教網に滞るべ

だいぼんてんのうもんぶつけつぎきよう

い

われ

からず。ここをもつて大梵天王問仏決疑經に云わく「吾に

しようぼうげんぞう

ねはん

みようしん

じつそうむそう

みみよう

ほうもんあ

きようげ

正法眼蔵、涅槃の妙心、実相無相、微妙の法門有り。教外

べつでん もんじ た ま かかしよう ふぞく
に別伝し、文字を立てず、摩訶迦葉に付嘱す」とて、迦葉に

ぜん いっぽう きようげ つた み
この禅の一法をば教外に伝うと見えたり。

しゆたら きようぎよう つき ゆび つき み のち ゆびなに
すべて修多羅の経教は月をさす指、月を見て後は指何

こころ ほんぶん ぜん いちり し のち ぶつきよう こころ
かはせん。心の本分、禅の一理を知つて後は、仏教に心

とど こじんい じゆうにぶきよう かん
を留むべしや。されば古人云わく「十二部経はすべてこれ閑

もんじ うんぬん しゆう ろくそ えのう だんきよう ひけん
文字」と云々。よつて、この宗の六祖・慧能の壇経を披見

まこと げんか かいえ のち きよう
するに、実にもつてしかなり。言下に契会して後は、教は

なに ことわり わきま
何かせん。この理いかんが弁えんや。

しょうにんしめ い なんじ ほうもん お どうり あん
聖人示して云わく、汝まず法門を置いて道理を案ぜよ。

そもそも、我、一代の大途を伺わず十宗の淵底を究めず

して、国を諫め人を教うべきか。汝が談ずるところの禅は、

我最前に習い極めてその至極を見るに、はなはだもつて

僻事なり。禅に三種あり。いわゆる、如来禅と教禅と祖師

禅となり。汝が言うところの祖師禅等の一端、これを示さ

ん。聞いてその旨を知れ。

もし教を離れてこれを伝うといわば、教を離れて理無

く、理を離れて教無し。理全く教、教全く理という道理、

汝これを知らざるや。「拈華微笑して、迦葉に付嘱し給う」

きよう

ふりゆうもんじ

しじ

すなわ

というも、これ教なり。「不立文字」という四字も、即ち

きよう

もんじ

わかんりようごく

ことふ

いま

教なり、文字なり。このこと、和漢両国に事旧りぬ。今い

ことあたら

に

いち

りよう

もん

かんが

なんじ

まよ

えば事新しきに似たれども、一・両の文を勘えて汝が迷

はら

いを払わしめん。

ほちゆうじゆういち

い

ごんぜつ

とごお

い

補註十一に云わく「また、もし言説に滞ると謂わば、

しやばせかい

まさ

なに

ぶつじ

ぜん

しばらく娑婆世界には、将に何をもつて仏事となさんや。禅

と

ごんぜつ

ひと

しめ

もんじ

はな

げだつ

ぎ

徒あに言説もて人に示さざらんや。文字を離れて解脱の義

だん

き

ないし

つぎしも

い

を談ずることなし。あに聞かざらんや」。乃至、次下に云わ

だるまにし

きた

ただ

じんしん

さ

けんしよう

く「あに達磨西より来つて『直ちに人心を指し見性して

じようぶつ

けごんとう

しよだいじようきよう

成仏す』というに、しかも華嚴等の諸大乘経にこのこと

な せにん なん おろ

なんだちまさ ほとけ

無からんや。ああ、世人、何ぞそれ愚かなるや。汝等当に仏

しよせつ しん しよぶつによらい みこと こもうな

の所説を信ずべし。諸仏如来は言に虚妄無し」。

もん こころ きようもん 滞 ごんぜつ

この文の意は、もし教文にとどこおり言説にかかわる

きよう ほか しゆぎよう しやばこく

とて教の外に修行すといわば、この娑婆国にはさていか

ぶつじ ぜんこん な い ぜんにん

んがして仏事・善根を作すべき。さように云うところの禅人

ひと おし とき ことば い うえ

も、人に教うる時は言をもつて云わざるべしや。その上、

ぶつどう げりよう い とき もんじ はな ぎ だるまにし

仏道の解了を云う時、文字を離れて義なし。また達磨西よ

きた ただ じんしん さ ほとけ い ほど ことわり

り来つて直ちに人心を指して仏なりと云う。これ程の理

は、華嚴・大集・大般若等の法華已前の権大乘経にも在々
しよしよ だん むげ

処々にこれを談ぜり。これをいみじきこととせんは、無下に

い いま よ ひと なん 甚

云うかいなきことなり。ああ、今の世の人、何ぞはなはだ

僻 ちゆうどうじつそう り かいとう みようかくかまん

ひがめるや。ただ中道実相の理に契当せる妙覚果満の

によらい じようたい みこと しん

如来の誠諦の言を信ずべきなり。

みようらくだいし ぐけつ いち り しゃく い

また妙楽大師、弘決の一に、この理を釈して云わく

せにん きよう ないがし りかん たつと あやま

「世人、教を蔑ろにして理観を尚ぶは、誤れるかな、

あやま もん こころ いま よ ひとびと かんじん

誤れるかな」と。この文の意は、今の世の人々は、観心・

かんぼう さき きようぎよう たず まな かえ きよう 蔑

観法を先として経教を尋ね学ばず、還つて教をあなずり

経をかるしむる、これ誤れりと云う文なり。

ぞくこうそうでん ひけん

その上、当世の禅人、自宗に迷えり。続高僧伝を披見す

しゅうぜん しよそ だるまだいし でん い きよう よ しゅう

るに、習禅の初祖・達磨大師の伝に云わく「教に藉つて宗

さと によらいいちだい しようぎよう どうり しゅうがく ほうもん むね

を悟る」。如来一代の聖教の道理を習学し、法門の旨、

しゅうじゅう さた し だるま でし ろくそ だいに

宗々の沙汰を知るべきなり。また達磨の弟子、六祖の第二

そ えか でん い だるまぜんじ しかん りようが か

祖・慧可の伝に云わく「達磨禅師、四卷の楞伽をもつて可に

さず い われ かん ち み きよう あ

授けて云わく『我、漢の地を觀るに、ただこの経のみ有り。

きみ えぎよう おの よ ど え

仁者、依行せば、自ずから世を度することを得ん』と。こ

もん こころ だるまだいしてんじく とうど きた しかん

の文の意は、達磨大師天竺より唐土に來つて、四卷の

りようがきよう

えか さず

い

われ

くに

み

楞伽經をもつて慧可に授けて云わく「我この国を見るに、

きようこと

すぐ

なんじたも

しゆぎよう

ほとけ

な

この經殊に勝れたり。汝持ち修行して仏に成れ」とな

り。

そし

すで

きようもん

さき

きよう

これらの祖師、既に經文を前とす。もしこれによつて經

よ

い

だいじよう

しようじよう

ごんきよう

じつきよう

よ

に依ると云わば、大乘か小乗か、權教か実教か、能く

よ わきま

きよう

もち

ぜんしゆう

能く弁うべし。あるいは經を用いるには、禪宗も

りようがきよう

しゆりようごんぎよう

ごんごうはんにやきようとう

みなほっけい

楞伽經・首楞嚴經・金剛般若經等による。これ皆法華已

ぜん ごんきよう

ふぞう

せつ

しよきよう

ぜしんそくぶつ

そくしんぜぶつ

前の權教、覆藏の説なり。ただ諸經に「是心即仏、即心是仏」

とう り かた

と

いち

りよう

もん

く

まよ

だいしよう

ごん

等の理の方を説ける一・両の文と句とに迷つて、大小、權

実、じつ 顕露・覆蔵をも尋ねず、けんろ ふぞう たず ただ不二を立てて而二を知ら

ず、「己仏に均しと謂う」の大慢を成せり。彼の月氏の大慢

が迹をつぎ、しやく 繼 この尸那の三階禅師が古風を追う。しかりと

いえども、大慢は生きながら無間に入り、三階は死して大蛇

と成りぬ。な 恐 おそろし、おそろし。

釈尊は、三世了達の解了朗らかに、妙覚果満の智月潔

くして、未来を鑑みたまい、像法決疑經に記して云わく

「諸の悪比丘、あるいは禅を修すること有るも、經論に

依らず。自ら己見を逐つて、非をもつて是となし、これ邪

しょう

ふんべつ

あた

どうぞく

む

なりこれ正なりと分別すること能わず。あまねく道俗に向

ことば

な

われよ

し

われ

かつて、かくのごとき言を作さん。『我能くこれを知り、我

よ

み

まさ

し

ひと

すみ

わ

能くこれを見る』と。当に知るべし、この人は速やかに我が

ほう めつ

もん

こころ

もろもろ

あくびくあ

ぜん

法を滅せん」。この文の意は、諸の悪比丘有つて、禅を

しんこう

きようろん

たず

じゃけん

もと

ほうもん

ぜひ

信仰して経論をも尋ねず、邪見を本として法門の是非をば

わきま

なん

によ

に

ほつしどう

む

われ

弁えずして、しかも男・女・尼・法師等に向かつて「我よ

ほうもん

し

ひと

い

ぜん

ひろ

く法門を知れり。人はしらず」と云つて、この禅を弘むべ

まさ

し

ひと

わ

しょうほう

めつ

し。当に知るべし、この人は我が正法を滅すべしとなり。

もん

とうせい

み

ふけい

なんじ

この文をもつて当世を見るに、あたかも符契のごとし。汝

つつし

なんじおそ

慎むべし、汝畏るべし。

さき だん

てんじく

にじゅうはちそ あ

ほうもん

先に談ずるところの、天竺に二十八祖有つてこの法門を

くでん

しょうこ

い

ぶつぼう

口伝すということ、その証拠いずれに出でたるや。仏法を

そうでん

ひと

にじゅうしにん

にじゅうさんにん

み

相伝する人、二十四人あるいは二十三人と見えたり。しか

にじゅうはちそ

た

い

ほんやく

るを、二十八祖と立つること、出だすところの翻訳いずれ

まった

み

ふほうぞう

ひと

にかある。全く見えざるところなり。この付法蔵の人のこ

わたくし

か

によらい

きもん

ふんみよう

と、私に書くべきにあらず。如来の記文、分明なり。

ふほうぞうでん

い

びくあ

な

しし い

その付法蔵伝に云わく「また比丘有り、名づけて師子と曰

けいひんこく

おお

ぶつじ

な

とき

か

こくおう

う。罽賓国において大いに仏事を作す。時に彼の国王をば

みらくつ な じゃけんしじょう こころ きょうしん な けいひんこく

弥羅掘と名づけ、邪見熾盛にして心に敬信無く、罽賓国に

とうじ きえ しゆそう さつがい すなわ りけん

おいて塔寺を毀壊し、衆僧を殺害す。即ち利剣をもつて、

しし き くび なか ちな にゆう

もつて師子を斬る。頸の中に血無く、ただ乳のみ流れ出ず。

ほう あいふ ひと すなわ た もん こころ

法を相付する人、ここにおいて便ち絶えん」。この文の意

ほとけ わ にゆうねはん のち わ ほう そうでん ひとにじゅうしにん

は、仏、我が入涅槃の後に我が法を相伝する人二十四人あ

なか さいごぐつう ひと あ ししびく い

るべし。その中に最後弘通の人に当たるをば師子比丘と云

けいひんこく くに わ ほう ひろ か くに おう

わん。罽賓国という国にて我が法を弘むべし。彼の国の王を

だん みらおう い じゃけんほういつ ぶつぼう しん

ば檀弥羅王と云うべし。邪見放逸にして、仏法を信ぜず、衆

そう うやま どうとう やぶ うしな つるぎ しよそう くび き

僧を敬わず、堂塔を破り失い、剣をもつて諸僧の頸を切

るべし。即ち師子比丘の頸をきららん時に、頸の中に血無く、

にゆう

とき

ぶつぼう

そうでん

ひとた

ただ乳のみ出ずべし。この時に仏法を相伝せん人絶ゆべし

さだ

あん

ほとけ

みことたが

ししそんじゃ

と定められたり。案のごとく、仏の御言違わず、師子尊者

くび

たも

まこと

おう

腕

頸をきらられ給うこと、実にもつてしかなり。王のかいな、

とも

連

お

お

共につれて落ち畢わんぬ。

にじゆうはちそ

た

びやつけん

ぜん

二十八祖を立つること、はなはだもつて僻見なり。禅の

ひがごと

おこ

いま

えのう

だんきよう

にじゆうはちそ

僻事、これより興るなるべし。今、慧能が壇経に二十八祖

た

だるま

こうそ

さだ

とき

しし

だるま

ねん

を立つることは、達磨を高祖と定むる時、師子と達磨との年

きはる

さんにん

ぜんし

わたくし

つく

い

てんじく

紀遥かなるあいだ、三人の禅師を私に作り入れて、「天竺

より来れる付法蔵、系乱れず」と云つて、人に重んぜさせ

きた ふほうぞう けいみだ い ひと おも

んための僻事なり。このこと異朝にして事旧りぬ。補註の

ひがごと いちよう ことふ ほちゆう

十一に云わく「今家は二十三祖を承用す。あに誤り有ら

じゆういち い こんけ にじゆうさんそ しようよう あやま あ

んや。もし二十八祖を立つるは、いまだ出だすところの翻訳

み きんらい いし きざい はん ちりば しちぶつ

を見ざるなり。近来さらに石に刻み、版に鏤め、七仏・

にじゆうはちそ ずじよう おのおのいちげ でんじゆあいふ あ

二十八祖を図状し、各一偈をもつて伝授相付すること有

かたくなん はなは しきしやちからあ

り。ああ、仮託何ぞそれ甚だしきや。識者力有らば、よ

へい あらた にじゆうはちそ た いし

ろしくこの弊を革むべし」。これも、二十八祖を立て、石に

刻 はん 鏤 った あやま

きざみ、版にちりばめて伝うることに、はなはだもつて誤れ

り、このことを知る人あらば、この誤りをあらためなおせ
となり。

祖師禪、はなはだ僻事なること、ここにあり。先に引く

ところの大梵天王問仏決疑經の文を、教外別伝の証拠に汝

これを引く。既に自語相違せり。その上、この經は説相

権教なり。また開元・貞元の再度の目録にも全く載せず。

これ録外の經なる上、権教と見えたり。しかれば、世間の

学者用いざるところなり。証拠とするにたらず。

そもそも、今の法華經を説かるる時益をうる輩、迹門

かいによさんぜん　とき　はいしゆ　にじよう　ぶつしゆ　きぎ　しじゆうにねん　あいだ
界如三千の時、敗種の二乗、仏種を萌す。四十二年の間は
なが　じようぶつ　きり　ざいざいしよしよ　しゆうえ

「永く成仏せず」と嫌われて、在々処々の集会にして

めり　ひぼう　こえ　き　にんてんたいえ　おも　疎　すで

罵詈・誹謗の音をのみ聞き、人天大会に思いうとまれて既に

う　し　ひとびと　いま　きよう　きた　しやりほつ　けこう

飢え死ぬべかりし人々も、今の経に来て、舍利弗は華光

によらい　もくれん　たま　らばつせんだんこうによらい　あなん　さんがいえ　じぎいつうおうぶつ

如来、目連は多摩羅跋梅檀香如来、阿難は山海慧自在通王仏、

らごら　とうしつぼうけ　によらい　ごひやく　らかん　ふみようによらい　にせん

羅睺羅は蹈七宝華如来、五百の羅漢は普明如来、二千の

しょうもん　ほうそうによらい　きべつ　あず　けんぼんおんじゆ　ひ　みじんしゆ

声聞は宝相如来の記別に予かる。頭本遠寿の日は、微塵数

ぼさつ　ぶつ　ま　しろう　そん　だいかく　とな　てんだい

の菩薩、道を増し生を損じて、位大覚に隣る。されば、天台

だいし　しゃく　ひけん　たきよう　ぼさつ　ほとけ　成　い

大師の釈を披見するに、他経には、菩薩は仏になると云つ

にじよう

とくどう

なが

な

ぜんにん

ほとけ

い

て二乗の得道は永くこれ無し。善人は仏になると云つて

あくにん

じようぶつ

あ

なんし

ほとけ

と

によにん

悪人の成仏を明かさず。男子は仏になると説いて女人は

じごく

つか

さだ

にんてん

ほとけ

い

ちくるい

ほとけ

地獄の使いと定む。人天は仏になると云つて畜類は仏に

こんきよう

みなほとけ

と

なるといわず。しかるを、今経はこれらが皆仏になると説

く。たのもしきかな。

まつだいじよくせ

しろう

う

だいば

ごぎやく

末代濁世に生を受くといえども、提婆がごとくに五逆を

つく

さんぎやく

おか

だいば

てんのうによらい

も造らず、三逆をも犯さず。しかるに、提婆なお天王如来

きべつ

え

おか

われ

み

はっさい

の記別を得たり。いわんや、犯さざる我らが身をや。八歳の

りゆうによ

すで

じやしん

あらた

なんぼう

みようか

あらわ

竜女、既に蛇身を改めずして南方に妙果を証す。いわん

や、人界に生を受けたる女人をや。ただ得難きは人身、値

がた

しょうほう

なんじ

はや

じゃ

ひるがえ

しょう

つ

ぼん

い難きは正法なり。汝、早く邪を翻して正に付き、凡

へん

しょう

しょう

おも

ねんぶつ

しんごん

ぜん

りつ

す

を転じて聖を証せんと思わば、念仏・真言・禪・律を捨て

いちじょうみようてん

じゆじ

もうぜん

て、この一乗妙典を受持すべし。もししからば、妄染の

じんえ

はら

しょうじよう

かくたい

しょう

うたが

塵穢を払って清浄の覚体を証せんこと疑いなかるべし。

ぐにん

い

いま

しょうにん

きようかい

ちようもん

ひごろ

ここに愚人云わく、今、聖人の教誡を聴聞するに、日来

あいまい

あ

てんしんはつめい

い

の矇昧たちまちに開けぬ。天真発明とも云いつべし。理非

けんねん

たれ

しんごう

せじよう

み

顕然なれば、誰か信仰せざらんや。ただし、世上を見るに、

かみいちにん

しもばんみん

いた

ねんぶつ

しんごん

ぜん

りつ

ふか

しん

上一人より下万民に至るまで、念仏・真言・禪・律を深く信

受し御坐します。さる前には、国土に生を受けながら、いかでか王命を背かんや。その上、我が親といい、祖といい、かたがた念仏等の法理を信じて、他界の雲に交わり畢わんぬ。

また日本には上下の人数いくばくか有る。しかりといえ

ども、權教・權宗の者は多く、この法門を信ずる人はい

まだその名をも聞かず。よつて、善処・悪処をいわず、邪法・

正法を簡ばず、内典五千・七千の多きも外典三千余卷の広

きも、ただ主君の命に随い父母の義に叶うが肝心なり。さ

れば、教主釈尊は天竺にして孝養・報恩の理を説き、孔子

だいとう

ちゆうこう

こうこう

どう

しめ

し

おん

ほう

ひと

は大唐にして忠功・孝高の道を示す。師の恩を報ずる人は、

にく

裂

み

投

しゆ

おん

知

ひと

こうえん

はら

割

肉をさき身をなぐ。主の恩をしる人は、弘演は腹をさき、

よじよう

つるぎ

呑

おや

おん

おも

ひと

ていらん

き

刻

予譲は剣をのむ。親の恩を思いし人は、丁蘭は木をきざみ、

はくゆ

つえ

泣

じゆ

げ

ない

どう

こと

こと

こと

こと

伯瑜は杖になく。儒・外・内、道は異なりといえども、報恩

しゃとく

おし

か

か

か

か

か

か

か

か

か

謝徳の教えは替わることなし。しかれば、主・師・親のい

しゃとく

おし

か

か

か

か

か

か

か

か

か

まだ信ぜざる法理を我始めて信ぜんこと、既に違背の過に

しず

沈みなん。法門の道理は、経文明白なれば、疑網すべて尽

しず

きぬ。後生を願わずば、来世苦に沈むべし。進退これ谷ま

しず

われり。我われいかんがせんや。

しょうにんい

なんじ

りし

ことば

聖人云わく、汝この理を知りながら、なおこの語をな

りとう

こころ およ

われ

しやくそん

ゆいほう

す。理の通ぜざるか、意の及ばざるか。我、釈尊の遺法を

ぶつぼう

かた

い

このかた

ちおん

さい

まなび仏法に肩を入れしより已来、知恩をもって最とし、

ほうおん

さき

よ

しおん

し

じんりん

名

報恩をもって前とす。世に四恩あり。これを知るを人倫とな

し

ちくしやう

よ

ふぼ

ごせ

たす

こつか

おん

づけ、知らざるを畜生とす。予、父母の後世を助け国家の恩

とく

ほう

おも

ゆえ

しんみやう

す

たじ

徳を報ぜんと思ふが故に身命を捨つること、あえて他事に

ちおん

むね

あらず、ただ知恩を旨とするばかりなり。

なんじ

め

塞

こころ

しず

どうり

おも

われ

ぜんどう

まず、汝、目をふさぎ心を静めて道理を思え。我は善道

をし 知りながら、親おやと主しゆとの悪道あくどうにかからんを諫いさめざらんや。

また愚人ぐにん狂い酔よって毒どくを服ふくせんを我われ知りながら、これを

いましめざらんや。そのごとく法門ほうもんの道理どうりを存ぞんじて火血刀

の苦くを知りながら、いかでか恩おんを蒙こうむる人の悪道あくどうにおちんこ

とを歎なげかざらんや。身みをもなげ、命いのちをも捨すつべし。諫いさめて

もあきたらず、歎なげきても限りなし。今生こんじように眼まなこを合あわする苦くる

しみ、なおこれを悲かなしむ。いわんや、悠々ゆうゆうたる冥途めいどの悲かなし

み、あに痛いたまざらんや。恐おそれても恐おそるべきは後世ごせ、慎つつしんで

も慎つつしむべきは来世らいせなり。しかるを、是非ぜひを論ろんぜず親おやの命めいに

したが じやしよう えら しゅ おお したが い ぐち

随い、邪正を簡ばず主の仰せに順わんと云うこと、愚癡

まえ ちゆう こう に けんじん ところ ふちゆう ふこう

の前には忠・孝に似たれども、賢人の意には不忠・不孝こ

す

れに過ぐべからず。

きようしゅしやくそん てんりんしょうおう すえ ししきようおう まご

されば、教主釈尊は、転輪聖王の末、師子頰王の孫、

じようぼんのお ちやくし ごてんじく だいおう

浄飯王の嫡子として五天竺の大王たるべしといえども、

しようにむじよう ことわり 覚 しゅつりげだつ どう ねが よ いと

生死無常の理をさとり、出離解脱の道を願って世を厭い

たま じようぼんだいおう なげ しほう しき いろ あらわ

給いしかば、浄飯大王これを歎き、四方に四季の色を顕し

たいし みこころ とど たてまつ たく たも ひがし かすみ

て太子の御意を留め奉らんと巧み給う。まず東には、霞

棚 引 絶 間 雁 越え 路 かえ まど うめ

たなびくたえまよりかりがねこしじに帰り、窓の梅の

かぎよくれん うち 通 嫻々々 はな いろ 百 轉

香玉簾の中にかよい、じようじようたる花の色、ももさえず

うぐいす たる けしき あらわ みなみ いずみ いろしろ 妙

りの鶯、春の気色を顕せり。南には、泉の色白たえに

たまがわ う はな しのだ もり 時 鳥 なつ

して、かの玉川の卯の華、信太の森のほととぎす、夏のす

あらわ にし もみじとこは まじ にしき

がたを顕せり。西には、紅葉常葉に交われればさながら錦を

織 まじ おぎ吹 かぜしす まつ あらし 物 凄 す

おり交え、萩ふく風閑かにして松の嵐ものすごし。過ぎに

なつ 名 残 さわべ ほたる ひかり 天 そら ほし

し夏のなごりには、沢辺にみゆる蛍の光あまつ空なる星

あやま まつむし すずむし こえこえなみだ もよお きた か

かと誤り、松虫・鈴虫の声々涙を催せり。北には、枯れ

の いろ 物 憂 いけ みぎわ 氷 柱 居 たに おがわ

野の色いつしかものうく、池の汀につららいて、谷の小川

音 寂

もおとさびぬ。

有様

つく

みこころ

たも

かかるありさまを造つて御意をなぐさめ給うのみならず、

しもん ごひやくにん

つわもの

お

しゅご

たま

つい

四門に五百人ずつの兵を置いて守護し給いしかども、終

たいし

おんとしじゅうく

もう

にがつようか

よわ

ころ

しゃのく

め

に太子の御年十九と申せし二月八日の夜半の比、車匿を召

こんでいこま

くらお

がやじよう

い

だんどくせん

い

して金泥駒に鞍置かせ、伽耶城を出でて檀特山に入り、

じゅうにねん

こうざん

たきぎ

採

しんこく

みず

むす

なんぎようくぎよう

たま

十二年、高山に薪をとり深谷に水を結んで難行苦行し給

さんじゅうじようどう

みようか

かんとく

さんがい

どくそん

いちだい

きようしゅ

い、三十成道の妙果を感得して、三界の独尊、一代の教主

な

ふぼ

すく

ぐんじよう

みちび

たま

ふこう

と成つて、父母を救い群生を導き給いしをば、さて不孝の

ひと

もう

ほとけ

ふこう

ひと

い

くじゅうごしゅ

人と申すべきか。仏を不孝の人と云いしは、九十五種の

げどう

ふぼ

めい

そむ

むい

い

かえ

ふぼ

みちび

外道なり。父母の命に背いて無為に入り、還つて父母を導

くは、孝の手本なること、こう てほん 仏その証拠なるべし。ほとけ しょうこ

彼の浄蔵・浄眼は、父の妙莊嚴王、外道の法に著しか じょうぞう じょうげん ちち みょうしょうごんのう げどう ほう じゃく

て仏法に背き給いしかども、二人の太子は父の命に背いてぶつぽう そむ たま ににん たいし ちち めい そむ

雲雷音王仏の御弟子となり、終に父を導いて沙羅樹王仏とうんらいおんのうぶつ みでし つい ちち みちび しゃらじゅおうぶつ

申す仏になし申されけるは、不孝の人と云うべきか。経文もう ほとけ もう ふこう ひと い きょうもん

には「恩を棄てて無為に入るは、真実に恩を報ずる者なり」おん す むい い しんじつ おん ほう もの

と説いて、今生の恩愛をば皆すてて仏法の実の道に入る、と こんじょう おんあい みな ぶつぽう じつ どう い

これ実に恩をしれる人なりと見えたり。まこと おん 知 ひと み

また、主君の恩の深きこと、汝よりも能くしれり。汝もしゅくん おん ふか なんじ よ 知 なんじ

し知恩ちおんの望みのぞあらば、深くふか諫めいさ、強しいて奏そうせよ。非道ひどうにも

主命しゆめいに随したがわんといふこと、佞臣ねいしんの至いたり、不忠ふちゆうの極きわまりなり。

殷いんの紂王ちゆうおうは悪王あくおう、比干ひかんは忠臣ちゆうしんなり。政事まつりごと理りに違たがいしを見み

て強しいて諫いさめしかば、即すなわち比干ひかんは胸むねを割さかる。紂王ちゆうおうは比干ひかん

死しして後のち、周しゆうの王おうに打うたれぬ。今いまの世よまでも比干ひかんは忠臣ちゆうしんと

いわれ、紂王ちゆうおうは悪王あくおうといわる。夏かの桀王けつおうを諫いさめし竜逢りゆうほうは

頭こうべをきけつられぬ。されども、桀王あくおうは悪王あくおう、竜逢りゆうほうは忠臣ちゆうしんとぞ

云いう。「主君しゆくんを三度さんど諫いましむるに用もちいずば山林さんりんに交まじわれ」とこ

そ教おしえたれ。何なんぞその非ひを見みながら黙もくせんと云いうや。

いにしえ けんじん よ のが さんりん まじ せんしやう あつ

古の賢人、世を遁れて山林に交わりし先蹤を集めて、

なんじ ぐじ き いん よ たいこうぼう はんけい

いささか汝が愚耳に聞かしめん。殷の代の太公望は磻溪と

たに かく しゆう よ はくい しゆくせい しゆようざん やま こ

いう谷に隠る。周の代の伯夷・叔齊は首陽山という山に籠

しん きりき しやうらくざん い かん げんこう こてい こ

もる。秦の綺里季は商洛山に入り、漢の嚴光は孤亭に居し、

しん かいしすい めんじやうざん かく ふちゆう い

晋の介子綏は綿上山に隠れぬ。これらをば不忠と云うべき

おろ なんじ ちゆう ぞん いさ こう おも い

か。愚かなり。汝、忠を存せば諫むべし。孝を思わば言う

べきなり。

なんじ こんきやう こんしゆう ひと おお しゆう ひと すく

まず、汝「權教・權宗の人は多く、この宗の人は少な

なん た す しやう っ い かなら おお たつと

し。何ぞ多を捨てて少に付く」と云うこと、必ず多きが尊

くしてすく少なきが卑いやしきにけんぜんあらず。賢善ひとの人はまれ希に、愚悪ぐあくの者もの

は多おおし。麒麟きりん・鸞鳳らんほうは禽獸きんじゆうの奇秀きしゆうなり。しかれども、これ

ははなはだ甚少なし。牛羊ごよう・鳥鴿うごうは畜鳥ちくちようの拙卑せつひなり。されど

も、これはうた転た多し。必ず多かならきがたつとくして少なきが尊

いやしくば、麒麟きりんをすてて牛羊ごようをとり、鸞鳳らんほうをさしお閣うごういて鳥鴿

をとるべきか。摩尼まに・金剛こんごうは金石きんせきの靈異りよういなり。この宝たからは乏とも

しく、瓦礫がりやく・土石どしやくは徒物いたずらものの至いたり、これはまた巨多こたなり。汝なんじ

が言ことばのごとくたまならば、玉たまなんどをば捨すてて瓦礫がりやくを用もちゆべき

か。はかなし、はかなし。聖君せいくんは希まれにして千年せんねんに一ひとたび出いで、

けんき ごひやくねん ひと あらわ まに むな な き りん

賢佐は五百年に一たび顕る。摩尼は空しく名のみ聞く。麟

ほうたれ じつ み せけん しゅつせ よ もの とほ あ

鳳誰か実を見たるや。世間・出世、善き者は乏しく、悪し

もの おお がんぜん なん すく

き者は多きこと眼前なり。しかれば、何ぞあながちに少な

疎 おお せん どしや おお

きをおろかにして多きを詮とするや。土沙は多けれども、

べいこく まれ ぼくひ じゅうまん ふけん さしやう なんじ

米穀は希なり。木皮は充満すれども、布絹は些少なり。汝

しやうり さき べつ ひと おお ほん

ただ正理をもつて前とすべし。別して人の多きをもつて本

とすることなかれ。

ぐにん せき 去 たもと 搔 繕 い まこと

ここに、愚人、席をさり袂をかいつくろいて云わく、誠

しやうぎやう ことわり 聞 じんしん えがた てんじやう いとすじ

に聖教の理をきくに、人身は得難く、天上の糸筋の

かいてい はり つらぬ まれ ぶつぼう き がた いちげん

海底の針に貫けるよりも希に、仏法は聞き難くして、一眼

かめ う ぎ あ かた いますで えがた にんかい しょう

の亀の浮き木に遇うよりも難し。今既に、得難き人界に生

あ がた ぶつきょう けんもん こんじょう 黙

をうけ、値い難き仏教を見聞しつ。今生をもだしては、

よ しょうじ はな ぼだい しょう そ

またいずれの世にか生死を離れ菩提を証すべき。夫れ、

いっこうじゆしょう ほね やま たか ぶつぼう

一劫受生の骨は山よりも高けれども、仏法のためにはいま

いっこつ 捨 たししょうおんあい なみだ うみ ふか

だ一骨をもすてず。多生恩愛の涙は海よりも深けれども、

ごせ ひとつき お つたな なか つたな

なお後世のためには一滴をも落とさず。拙きが中に拙く、

おろ なか おろ みょう 捨 み 破

愚かなるが中に愚かなり。たとい命をすて身をやぶるとも、

しょう かる ぶつどう い ふぼ ぼだい たす ぐしん ごくぼく

生を軽くして仏道に入り、父母の菩提を資け、愚身が獄縛

まぬか
をも免るべし。能く能く教えを示し給え。

ほけきよう しん

ぎようそごう

ごしゆ

ぎよう

そもそも、法華経を信ずるその行相いかん。五種の行の

なか

ぎよう

しゆ

ていねい

そんきよう

き

中には、まずいずれの行をか修すべき。丁寧に尊教を聞か

ねが

んことを願う。

しょうにんしめ

い

なんじ

らんしつ

とも

まじ

まほ

しょう

聖人示して云わく、汝、蘭室の友に交わつて麻畝の性

な

まこと

とくじゆ

かぶろ

はる

あ

さか

はな

と成る。誠に禿樹、禿にあらず、春に遇つて栄え花さく。

か くさ

か

なつ

い

あざ

うるお

枯れ草、枯るるにあらず、夏に入つて鮮やかに注う。もし

せんぴ

く

しょうり

い

たんじやく

ふち

ゆうえい

むい

みや

先非を悔いて正理に入らば、湛寂の潭に遊泳して無為の宮

ゆうゆう

うたが

に優遊せんこと、疑いなかるべし。

ぶつぼう ぐつう ぐんしょう りやく

そもそも、仏法を弘通し群生を利益せんには、まず教

き じ こく きようほうる ふ ぜんご わきま

ゆえん

機・時・国・教法流布の前後を弁うべきものなり。所以は、

とき しょう ぞう まつ ほう だい しょうじよう しゆぎよう しょう

時に正・像・末あり、法に大・小乗あり、修行に撰

しやく しょうじゆ とき しやくぶく ぎよう ひ しやくぶく とき

折あり。撰受の時、折伏を行ずるも非なり。折伏の時、

しょうじゆ ぎよう とが いま よ しょうじゆ とき

撰受を行ずるも失なり。しかるに、今の世は撰受の時か

しやくぶく とき し しょうじゆ ぎよう くに

折伏の時か、まずこれを知るべし。撰受の行は、この国

ほつけいちじゆん ひろ じゃほう じゃしいちにん

に法華一純に弘まりて邪法・邪師一人もなしといわん、こ

とき さんりん まじ かんぼう しゆ ごしゆるくしゆないしじつしゆとう

の時は、山林に交わって観法を修し、五種六種乃至十種等を

ぎよう しやくぶく とき きようぎよう

行ずべきなり。折伏の時は、かくのごとくならず。経教

掟

らんぎく

しよしゆう

蹟

ほま

ほしいまま

じやしゆうかた

のおきて蘭菊に、諸宗のおぎろ誉れを 擅 にし、邪正肩

なら

だいしゆうさき

あらそ

とき

ばんじ

さしお

ほうぼう

せ

を並べ、大小先を争わん時は、万事を閣いて謗法を責む

しやくぶく

しゆぎよう

むね

し

しゆうしやくみち

べし。これ折伏の修行なり。この旨を知らずして撰 折途

たが

とくどう

おも

あくどう

お

に違わば、得道は思いもよらず、悪道に墮つべしというこ

ほつけ

ねはん

さだ

お

てんだい

みようらく

げしやく

ふんみよう

と、法華・涅槃に定め置き、天台・妙楽の解釈にも分明な

ぶつぼうしゆぎよう

だいじ

り。これ仏法修行の大事なるべし。

たと

ぶんぶりようどう

てんか

おさ

ぶ

さき

譬えば、文武両道をもつて天下を治むるに、武を先とす

とき

ぶん

むね

とき

てんかむい

べき時もあり、文を旨とすべき時もあり。天下無為にして

こくどしず

とき

ぶん

さき

とうい

なんばん

さいじゆう

国土静かならん時は、文を先とすべし。東夷・南蛮・西戎・

ほくてき

ほうき

やしん

差

挟

ぶ

さき

北狄、蜂起して野心をさしはさまんには、武を先とすべき

ぶんぶ

善

こころ得

とき

ばんぼう

なり。文武のよきことばかりを心えて時をもしらず、万邦

あんど

おも

せけんむい

とき

かつちゆう

鎧

安堵の思いをなして世間無為ならん時、甲冑をよろい

ひようじよう

持

ひ

おうてきお

とき

せんじよう

兵杖をもたんことも非なり。また王敵起こらん時、戦場

ぶぐ

さしお

ひつけん

たずさ

とき

にして武具をば閣いて筆硯を提えんこと、これもまた時

そうおう

に相応せず。

しようじゆ

しやくぶぐ

ほうもん

しようほう

ひろ

摂受・折伏の法門もまたかくのごとし。正法のみ弘ま

じゃほう

じゃしな

とき

しんこく

い

かんせい

こ

つて邪法・邪師無からん時は、深谷にも入り閑静にも居し

どくじゆ

しよしや

かんねん

くふう

こ

てんか

て、読誦・書写をもし、観念・工夫をも凝らすべし。これ天下

しず ときひつけん もち
の静かなる時筆硯を用いるがごとし。 権宗・謗法、国にあ

とき しよじ さしお ほうぼう せ かつせん ば
らん時は、諸事を闇いて謗法を責むべし。これ合戦の場に

ひようじよう もち
兵杖を用ゆるがごとし。

しょうあんだいし ねはん しよ しゃく い むかし
しかれば、章安大師、涅槃の疏に釈して云わく「昔の

とき たい ほうひろ まさ かい たも つえ たも
時は平らかにして法弘まる。応に戒を持つべし。杖を持つ

いま とき けん ほうか まさ つえ たも
ことなかれ。今の時は嶮にして法翳くる。応に杖を持つべ

かい たも こんじやく けん まさ
し。戒を持つことなかれ。今昔ともに嶮ならば、応にとも

つえ たも こんじやく たい まさ かい
に杖を持つべし。今昔ともに平らかならば、応にとも戒

たも しゆしやよろ え いつこう
を持つべし。取捨宜しきを得て、一向にすべからず」。この

しやく こころ ふんみよう むかし よ 素直 ひと 正

釈の意、分明なり。昔は世もすなおに人もただしくし

じゃほう じゃぎな いぎ

て、邪法・邪義無かりき。されば、威儀をただし、穩便に

ぎようぎよう つ つえ ひと せ じゃほう 答

行業を積んで、杖をもつて人を責めず、邪法をとがむる

な いま よ じよくせ ひと こころ 僻 歪

こと無かりき。今の世は濁世なり。人の情もひがみゆがん

ごんきよう ほうぼう おほ しようほう ひろ

で権教・謗法のみ多ければ、正法弘まりがたし。この時は、

どくじゆ しよしや しゆぎよう かんねん くふう しゆれん むよう しやくぶく

読誦・書写の修行も觀念・工夫・修練も無用なり。ただ折伏

ぎよう ちから いせい ほうぼう 碎 ほうもん

を行じて、力あらば威勢をもつて謗法をくだき、また法門

じゃぎ せ しゆしや むね え いつこう

をもつても邪義を責めよとなり。取捨その旨を得て、一向に

しゆう か

執することなかれと書けり。

いま よ み しょうほういちじゆん ひろ くに じゃほう こうじよう
今の世を見るに、正法一純に弘まる国か、邪法の興盛

くに かんが じようどしゆう ほうねん ねんぶつ
する国か、勘うべし。しかるを、浄土宗の法然は、念仏に

たい ほけきよう しゃへいかくほう 読 ぜんどう ほけきよう ぞうぎよう
対して法華経を捨閑抛とよみ、善導は、法華経を雑行と

な せんちゆうむいち せんになしん いちにんとくどう
名づけ、あまつさえ千中無一とて、千人信ずとも一人得道の

もの か しんごんしゆう こうぼう ほけきよう けごん
者あるべからずと書けり。真言宗の弘法は、法華経を、華嚴

おと だいにちきよう さんじゆう れつ か けるん ほう さだ
にも劣り、大日経には三重の劣と書き、戲論の法と定め

しょうかくぼう ほけきよう だいにちきよう 履 取 およ
たり。正覚房は、法華経は大日経のはきものとりにも及ば

い しゃくそん だいにちによらい うしか 足 はん
ずと云い、釈尊をば大日如来の牛飼いにもたらずと判ぜり。

ぜんしゆう ほけきよう は 唾 つき ゆび きようもう
禅宗は、法華経を、吐きたるつばき、月をさす指、教網な

くだ しょうじょうりつとう ほけきょう じゃきょう てんま しょせつ な

んど下す。小乗律等は、法華経は邪教、天魔の所説と名

ほうぼう せ 余

づけたり。これらあに謗法にあらずや。責めてもなおあまり

いまし 足

あり。禁めてもまたたらず。

ぐにんい にほんろくじゅうよしゅう ひとか ほうこと

愚人云わく、日本六十余州、人替わり法異なりといえど

ねんぶつしゃ しんごんし ぜん

も、あるいは念仏者、あるいは真言師、あるいは禅、ある

りつ まこと いちにん ほうぼう ひと

いは律、誠に一人として謗法ならざる人はなし。しかりと

ひと うえさ た 何 わ しんちゆう ふか

いえども、人の上沙汰してなにかせん。ただ我が心中に深

しんじゆ ひと あやま よそ おも

く信受して、人の誤りをば余所のこととせんとする。

しょうにんしめ い なんじい まこと

聖人示して云わく、汝言うところ実にはかなり。我も

われ

ぎ そん

きようもん

しんみよう

お

その義を存せしところに、きようもん 経文には、あるいは「身命を惜お

しんみよう うしな

と

しまず」とも、あるいは「むしろ身命を喪うとも」とも説と

なにゆえ

と

ぞん

ひと

く。何故にかようには説かるるやと存ずるに、ただ人を

憚

きようもん

ほうり

ぐつう

ほうぼう

ものおお

はばかりず経文のままに法理を弘通せば、きようもん 謗法の者多から

よ

かなら

さんるい

てきじんあ

いのち

およ

み

ん世には必ず三類の敵人有つて命にも及ぶべしと見えた

ぶつぼう

いもく

み

われ

責

こくしゆ

うった

り。その仏法の違目を見ながら、ぶつぼう 我もせめず国主にも訴え

おし

そむ

ぶつでし

と

ずば、おし 教えに背いて仏弟子にはあらずと説かれたり。

ねはんぎようだいさん

い

ぜんびく

ほう

やぶ

もの

み

涅槃経第三に云わく「もし善比丘あつて、法を壊る者を見

お

かしゃく

くけん

こしよ

まさ

し

て、置いて、呵責し驅遣し挙処せずんば、お 当に知るべし、

この人は仏法の中の怨なり。もし能く驅遣し呵責し挙処せば、これ我が弟子、真の声聞なり」。この文の意は、仏の正法を弘めん者、経教の義を悪しく説かんを聞き見ながら、我もせめず、我が身及ばずば国主に申し上げててもこれを対治せずば、仏法の中の敵なり。もし経文のごとくに、人をもはばからず、我もせめ国主にも申さん人は、仏弟子にして真の僧なりと説かれて候。

されば、「仏法の中の怨なり」の責めを免れんとて、かように諸人に悪まるれども、命を釈尊と法華経に奉り

慈悲を一切衆生に与えて謗法を責むるを、心えぬ人は、口

竦 まなこ いか なんじまこと ごせ おそ み かる

をすくめ眼を瞋らす。汝実に後世を恐れれば、身を軽しめ、

ほう おも しょうあんだいしい

法を重んぜよ。ここをもつて、章安大師云わく『むしろ

しんみよう うしな おし かく み かる ほう おも

身命を喪うとも、教えを匿さず』とは、身は軽く法は重し。

み ころ ほう ひろ もん こころ しんみよう 喪

身を死して法を弘む。この文の意は、身命をばほろぼす

しょうほう 匿 ゆえ み 軽 ほう 重

とも正法をかくさざれ、その故は、身はかるく法はおもし、

み 殺 ほう ひろ

身をばころすとも法をば弘めよとなり。

かな しょうじゃひつめつ なら ちようじゆ え

悲しいかな、生者必滅の習いなれば、たとい長寿を得た

ついで 脱 こんぜ ひやくねん うちと

りとも、終には無常をのがるべからず。今世は、百年の内外

ほど おも ゆめ なか ゆめ ひそう はちまんさい むじよう
の程を思えば、夢の中の夢なり。非想の八万歳、いまだ無常

まぬか

とうり

いつせんねん

たいもつ

かぜ

やぶ

を免れず。切利の一千年も、なお退役の風に破らる。いわ

にんげん

えんぶ

なら

つゆ

危

ばしよう

んや、人間・閻浮の習いは、露よりもあやうく、芭蕉より

脆

ほうまつ

徒

すいちゆう

やど

つき

有

無

ももろく、泡沫よりもあだなり。水中に宿る月のあるかな

くさば

置

つゆ

後

先

立

み

きかのごとく、草葉におく露のおくれさきだつ身なり。も

どうり

え

ごせ

いちだいじ

しこの道理を得ば、後世を一大事とせよ。

かんきぶつ

すえ

よ

かくとくびく

しようほう

ひろ

むりよう

歡喜仏の末の世の覚徳比丘、正法を弘めしに、無量の

はかい

ぎようじゃ

あだ

せ

うとくこくおう

しようほう

まも

破戒、この行者を怨んで責めしかば、有徳国王、正法を守

ゆえ

ほうぼう

せ

つい

みようじゆう

あしゆくぶつ

くに

う

る故に謗法を責めて、終に命終して阿閼仏の国に生まれ

て、彼の仏の第一の弟子となる。大乘を重んじて五百人の
婆羅門の謗法を誡めし仙予国王は、不退の位に登る。憑も
しいかな、正法の僧を重んじて邪悪の侶を誡むる人、か
くのごとくの徳あり。されば、今の世に摂受を行ぜん人は、
謗人とともに悪道に堕ちんこと疑いなし。南岳大師の四
安樂行に云わく「もし菩薩有つて、悪人を將護して治罰す
ること能わず乃至その人は命終して、諸の悪人とともに
地獄に堕ちん」。この文の意は、もし仏法を行ずる人有つ
て、謗法の悪人を治罰せずして觀念・思惟を専らにして、

か ほとけ だいいち でし だいじよう おも ごひやくにん

ばらもん ほうぼう いまし せんよこくおう ふたい くらい のぼ たの

しょうほう そお おも じゃあく りよ いまし ひと

くのごとくの徳あり。されば、今の世に摂受を行ぜん人は、

ほうにん あくどう お うたが なんがくだいし し

あんらくぎよう い ぼさつ あ あくにん しょうご じぼつ

安樂行に云わく「もし菩薩有つて、悪人を將護して治罰す

ること能わず乃至その人は命終して、諸の悪人とともに

地獄に堕ちん」。この文の意は、もし仏法を行ずる人有つ

て、謗法の悪人を治罰せずして觀念・思惟を専らにして、

ほうぼう あくにん じぼつ かんねん しゆい もつぱ

て、謗法の悪人を治罰せずして觀念・思惟を専らにして、

邪正・権実をも簡ばず、詐いつわつて慈悲の姿を現げんぜん人は、

諸もろもろの悪人とともに悪道に墮おつべしという文なり。今、

真言・念仏・禅・律の謗人をた糾ださず、いつわつて慈悲を現げん

ずる人、この文のごとくひとなるべし。

ここに愚人、意を窃ひそかにし、言を顛あらわにして云わく、誠まこと

に君を諫いさめて家を正ただしくすること、先賢の教え、本文ほんもんに明白めいはく

なり。外典げてんかくのごとし、内典ないてんこれに違たがうべからず。悪あくを見

ていましめず、謗ぼうを知しつてせめずば、経文きやうもんに背そむき、祖師そしに

違いせん。その禁いましめ殊ことに重おもし。今いまより信心しんじんを至いたすべし。ただ

きよう しゆぎよう たてまつ

かな

し、この経を修行し奉らんこと叶いがたし。もしその

さいよう

しやうこ

き

おも

最要あらば、証拠を聞かんと思う。

しやうにんしめ

い

いまなんじ

どうい

み

ていちよう

おんごん

聖人示して云わく、今汝の道意を見るに、鄭重・慇懃

しよぶつ

じやうたいとくどう

さいよう

なり。いわゆる、諸仏の誠諦得道の最要は、ただこれ

みようほうれんげきよう

ごじ

だんのう

ほうい

しりぞ

りゆうによ

じゃしん

妙法蓮華経の五字なり。檀王の宝位を退き、竜女が蛇身

あらた

ごじ

いた

そ

おも

を改めしも、ただこの五字の致すところなり。夫れ以んみ

いま

きよう

じゆじ

たしやう

いちげいつく

の

しゆぎよう

れば、今の経は受持の多少をば「一偈一句」と宣べ、修行

じこく

いちねんずいき

さだ

はちまんほうぞう

ひろ

の時刻をば「一念随喜」と定めたり。およそ八万法蔵の広き

いちぶはっかん

おお

ごじ

と

も、一部八巻の多きも、ただこの五字を説かんとためなり。

りようぜん くも うえ じゆぶ かすみ なか しやくそんよう むす じゆふぞく
靈山の雲の上、鷲峰の霞の中に、釈尊を結び地涌付囑
う ほつたい なにごと ようほう あ

を得ることありしも、法体は何事ぞ。ただこの要法に在り。

てんだい みようらく ろくせんちよう しょ たま つら どうざい ぎようまん

天台・妙楽の六千張の疏の玉を連ぬるも、道邃・行満の

すうじく しゃく こがね なら ぎしゆ い

数軸の釈の金を並ぶるも、しかしながら、この義趣を出で

ず。誠まことに生死しやうじを恐れ、涅槃ねはんを欣ねがい、信心しんじんを運び、渴仰かつごうを至いた

さば、遷滅無常は昨日の夢、菩提の覚悟は今日のうつつな

るべし。ただ南無妙法蓮華經とだにも唱え奉らば、滅せぬ

つみ きた あ しんじつ じんじん

罪やあるべき、来らぬ福や有るべき。真実なり、甚深なり。

これを信受すべし。

しんじゆ

これを信受すべし。

しんじゆ

これを信受すべし。

ぐにんたなごころ あ ひぎ お い きめいきも そ
愚人 掌 を合わせ、膝を折つて云わく、貴命肝に染み、

きようくんごころ どう
教訓意を動ぜり。しかりといえども、「上は能く下を兼ね」

ことわり ひろ せま くく おお すく か
の 理 なれば、 広きは狭きを括り、 多きは少なきを兼ね。

ごじ すく もんごん おお しゅだい せま
しかるところに五字は少なく、 文言は多し。 首題は狭く、

はちじく ひろ くどくさいとう
八軸は広し。 いかんぞ功德齊等ならんや。

しょうにんい なんじおろ すく おお と
聖人云わく、 汝愚かなり。 少なきを捨てて多きを取る

しゅう しゆみ たか せま かる ひと おも じよう
の 執、 須弥よりも高く、 狭きを軽んじ広きを重んずるの情、

めいかい ふか いま もん しょご かなら おお たつと すく
溟海よりも深し。 今の文の初後は、 必ず多きが尊く少な

い や さつき しめ
きが卑しきにあらざること、 前に示すがごとし。 ここにま

た、小が大を兼ね、一が多に勝るといふこと、これを談ぜ

しょう だい か いち た まさ
か にくるじゆ み けしさんぶん いち 背

ん。彼の尼拘類樹の実は、芥子三分が一のせいなり。され

こひやくりよう くるま かく とく しょう だい ふく

ども五百輛の車を隠す徳あり。これ小が大を含めるにあ

によいほうしゆ ひと まんぼう ふ

らずや。また如意宝珠は、一つあれども万宝を雨らして欠く

な すく おお か

るところこれ無し。これまた少なきが多きを兼ねたるにあ

せけん いち まん はは

らずや。世間のことわざにも「一は万が母」といへり。こ

どうり し せん じつそう り はいけい ろん

れらの道理を知らずや。詮ずるところ、実相の理の背契を論

たしやう しゆう

ぜよ。あながちに多少を執することなかれ。

なんじいた おろ いま ひと たと か

汝至つて愚かなり。今、一つの譬えを仮らん。夫れ、

そ

みようほうれんげきよう

いつさいしゅじよう

ぶつしよう

ほつしよう

妙法蓮華経とは、一切衆生の仏性なり。仏性とは法性

ほつしよう

ぼだい

しゃか

たほう

じつぼう

なり。法性とは菩提なり。いわゆる、釈迦・多宝・十方の

しよぶつ

じようぎよう

むへんぎようとう

ふげん

もんじゆ

しゃりほつ

もくれんとう

諸仏、上行・無辺行等、普賢・文殊、舍利弗・目連等、

だいぼんてんのう

しゃくだいかんいん

にちがつみようじよう

ほくとしちせい

にじゅうはつしゅく

大梵天王・釈提桓因、日月明星・北斗七星・二十八宿・

むりよう

しよしよう

てんしゅじるい

りゅうじんはちぶ

にんてんだいえ

えんまほうおう

無量の諸星、天衆地類・竜神八部・人天大会・閻魔法王、

かみ

ひそう

くも

うえ

しも

ならく

ほのお

そこ

いつさい

上は非想の雲の上、下は那落の炎の底まで、あらゆる一切

しゅじよう

そな

ぶつしよう

みようほうれんげきよう

な

衆生の備うるところの仏性を、妙法蓮華経とは名づくる

いつぺん

しゅだい

とな

たてまつ

いつさいしゅじよう

なり。されば、一遍この首題を唱え奉れば、一切衆生の

ぶつしよう

みな呼

あつ

とき

わ

み

ほつしよう

ほつぼうおう

仏性が皆よばれてここに集まる時、我が身の法性の法報応

さんじん

引

あらわ

い

じよぎぎつ

もつ

の三身ともにひかれて顯れ出ずる、これを成仏とは申すな

れい

かご

なか

とり

な

とき

そら

と

しゅちよう

どうじ

り。例せば、籠の内にある鳥の鳴く時、空を飛ぶ衆鳥の同時

あつ

み

かご

なか

とり

い

に集まる、これを見て籠の内の鳥も出でんとするがごとし。

ぐにんい

しゅだい

くどく

みようほう

ぎしゅ

いまき

ここに愚人云わく、首題の功德、妙法の義趣、今聞くと

つまび

ししゅ

まさ

きようもん

ころ詳らかなり。ただし、この旨趣、正しく経文にこれ

載

をのせたりや、いかん。

しょうにんい

りつまび

うえ

もん

たず

およ

聖人云わく、その理詳らかならん上は、文を尋ぬるに及

こ

したが

しめ

ほけきよう

ばざるか。しかれども、請いに随ってこれを示さん。法華経

だいはいち

だらにほん

い

なんだち

よ

ほつけ

な

じゅじ

第八の陀羅尼品に云わく「汝等はただ能く法華の名を受持

もの ようご

ふく はか

もん こころ

せん者を擁護せんすら、福は量るべからず」。この文の意は、

ほとけ きしもじん じゅうらせつによ ほけきよう ぎようじゃ まも ちか たも

仏、鬼子母神・十羅刹女の法華経の行者を守らんと誓い給

ほ なんだち ほつけ しゆだい たも ひと まも

うを讃むるとして、汝等「法華の首題を持つ人を守るべし」

ちか くどく さんぜりようだつ ほとけ ちえ およ

と誓うその功德は、三世了達の仏の智慧もなお及びがた

と ぶつち およ なに

しと説かれたり。仏智の及ばぬこと何かあるべきなれども、

ほつけ だいみようじゆじ くどく

法華の題名受持の功德ばかりはこれを知らずと宣べたり。

ほつけいちぶ くどく みようほうとう ごじ うち こ

法華一部の功德は、ただ妙法等の五字の内に籠もれり。

いちぶはちかん もんもん にじゅうはつぽんししようき替 しゆだい ごじ

一部八卷、文々ごとに二十八品生起かわれども、首題の五字

どうとう たと にほん にじ なか ろくじゅうよしゆう しまふた

は同等なり。譬えば、日本の二字の中に六十余州・島二つ、

入らぬ国い くにやあるべき、籠こもらぬ郡こおりやあるべき。飛鳥ひちようとよべ

ば空そらをかけるものしと知り、走獸そうじゆうといえちば地ちをは走しるものと

心こころうる。一切いつさい、名なの大切たいせつなること、けだし、もつてかくの

ごとし。天台てんだいは「名なは自性じしやうを詮せんじ、句くは差別さべつを詮せんず」とも、

「名なは大綱たいこうなり」とも判はんずる、この謂いいなり。また名なは物ものを

めす徳とくあり、物ものは名なに応おうずる用ゆうあり。法華題名ほっけだいみようの功徳くどくも、

またもつてかくのごとし。

愚人ぐにん云いわく、聖人しようにんの言ことばのごとくんば、実まことに首題しゆだいの功く、

莫大ばくだいなり。ただし、知しると知しらざるとの不同ふどうあり。我われは弓箭きゆうせん

たずさ

ひようじよう

旨

ぶつぼう

しんみ

し

に携わり、兵杖をむねとして、いまだ仏法の真味を知ら

ず。もししからば、得るところの功德何ぞそれ深からんや。

しょうにんい

えんどん

きようり

しよごまつた

ふに

しよい

聖人云わく、円頓の教理は初後全く不二にして、初位に

ごい とく

いちぎよう

いつさいぎよう

くどくそな

後位の徳あり。「一行は一切行」にして、功德備わらざる

な

なんじ

ことば

くどく

し

う

はこれ無し。もし汝が言のごとくんば、功德を知つて植え

かみ

とうがく

しも

みようじ

いた

とくやく

ずんば、上は等覚より下は名字に至るまで得益さらにある

いま

きよう

ほとけ

ほとけ

だん

ゆえ

べからず。今の経は「ただ仏と仏とのみ」と談ずるが故

ひゆほん

い

なんじしやりほつ

きよう

なり。譬喩品に云わく「汝舍利弗すら、なおこの経にお

しん

い

え

よ

しよもん

いては、信をもつて入ることを得たり。いわんや余の声聞

をもんやこころ。文の心は、大智舍利弗も、法華経には信しんをもつて入い

る。その智分の力にはあらず。いわんや自余の声聞ちぶん ちからをや

となり。されば、法華経にほけきよう きた来て信しんぜしかば、「永く成仏せ

ず」の名なを削けずつて華光如来けこうによらいとなり。嬰兒みどりごに乳にゅうを含ふくむるに、

その味あじを知しらずといえども、自然じねんにその身みを生長しょうちようす。医師くすし

が病者びようしゃに薬くすりをあた与うるに、病者びようしゃくすり薬こんげんの根源知をしらずといえ

ども、服ふくすれば任運にんうんと病愈やまいゆ。もし薬くすりの源みなもとをしらずと云い

つて医師くすしの与あたうる薬くすりを服ふくせずば、その病愈やまいゆべしや。薬くすり

を知るしも知しらざるも、服ふくすれば病やまいの愈いゆること、もつてこ

おな

れ同じ。

すで ほとけ ろうい ごう

ほう ろうやく たと

しゆじよう びようにん

既に仏を良医と号し、法を良薬に譬え、衆生を病人に

ちか

によらいちだい

きようほう

つ

ふる

わごう

みようほう

譬う。されば、如来一代の教法を擣き篋い和合して、妙法

ひとつぶ

ろうやく

がん

し

し

ふく

もの

一粒の良薬に丸ぜり。あに、知るも知らざるも、服せん者、

ぼんのう

やまい

びようしや

くすり

知

やまい

煩惱の病愈えざるべしや。病者は、薬をもしらず、病を

わきま

ふく

かなら

い

ぎようじや

も弁えずといえども、服すれば必ず愈ゆ。行者もまたし

ほうり

ぼんのう

かなり。法理をもしらず、煩惱をもしらずといえども、た

しん

けんじ

じんしや

むみよう

さんわく

やまい

どうし

だん

だ信ずれば、見思・塵沙・無明の三惑の病を同時に断じて、

じつぼう

じやつこう

うてな

ほんぬさんじん

はだえ

みが

うたが

実報・寂光の台にのぼり、本有三身の膚を磨かんこと疑

でんぎようだいしい のうけ しよけ

いあるべからず。されば、伝教大師云わく「能化・所化と

りやつこうな

みようほうきようりき

そくしんじようぶつ

ほけきよう

もに歴劫無し。妙法経力もて即身成仏す」と。法華経の

ほうり おし

ししよう

なら

でし

ひき

法理を教えん師匠も、また習わん弟子も、久しからずして

ほけきよう

ちから

ほとけ

もん

法華経の力をもつて、ともに仏になるべしという文なり。

てんだいだいし

ほけきよう

つ

げんぎ

もんぐ

しかん

さんじっかん

天台大師も、法華経に付いて、玄義・文句・止観の三十卷

しゃく

つく

たも

みようらくだいし

しゃくせん

しよき

ふぎよう

の釈を造り給う。妙楽大師は、また釈籤・疏記・輔行の

さんじっかん

まつもん

かさ

しようしゃく

てんだいろくじっかん

三十卷の末文を重ねて消釈す。天台六十卷とはこれなり。

げんぎ

みよう

たい

しゆう

ゆう

きよう

ごじゆうげん

こんりゆう

玄義には、名・体・宗・用・教の五重玄を建立して、

みようほうれんげきよう

ごじ

くのう

はんじやく

ごじゆうげん

しゃく

なか

妙法蓮華経の五字の機能を判釈す。五重玄を釈する中の

しゆう しやく い こうい ひ もく うぐい な
宗の釈に云わく「綱維を提くに目として動かざるること無く、

ころも いっかく ひ る きた な
衣の一角を牽くに縷として来らざるること無きがごとし」。

こころ みようほうれんげきよう しんこう たてまつ いちぎよう くどく
意は、この妙法蓮華経を信仰し奉る一行に、功德とし

きた ぜんこん うぐい たと
て来らざることなく、善根として動かざることなし。譬えば、

あみ め むりよう ひと おおづな ひ うぐい もく
網の目無量なれども一つの大綱を引くに動かざる目もなく、

ころも いとすじこた いっかく と いとすじ きた
衣の糸筋巨多なれども一角を取るに糸筋として来らざる

ことなきがごとしという義なり。さて、文句には「かくの
もんぐ

われき
ごときを我聞きき」より「札を作して去りにき」まで、文々
もんもん

くく いんねん やつきようほんじやくかんじんししゆしやくもう
句々に因縁・約教・本迹・観心の四種の釈を設けたり。

つぎ し かん

みょうげ うえ た

かんふしぎきよう

次に止観には、妙解の上に立つるところの観不思議境の

いちねんさんぜん

ほんかく りゆうぎよう ほんぐ りしん

いま くわ

一念三千、これ本覚の立行、本具の理心なり。今ここに委

しくせず。

よろこ

しやう ぶじよくあくせ う

いちじよう

悦ばしいかな、生を五濁悪世に受くといえども、一乗

しんもん けんもん

え きれんごうじや ぜんこん いた

の真文を見聞することを得たり。熙連恒沙の善根を致せる

もの きやう 遇 たてまつ しん と み なんじ いま

者、この経にあい奉って信を取ると見えたり。汝、今、

いちねんずいき しん いた かんがいそうおう かのうどうこううたが

一念随喜の信を致す。函蓋相応、感応道交疑いなし。

ぐにんこうべ た て あ い われ いま いちじつ

愚人頭を低れ、手を挙げて云わく、我、今よりは一実の

きやうおう じゆじ さんがい ぶくそん ほんし こんじん ぶっしん いた

経王を受持し三界の独尊を本師として、今身より仏身に至

しんじん

たいてんな

ごぎやく

くもあつ

るまで、この信心あえて退転無けん。たとい五逆の雲厚く

こ

だいばだった

じょうぶつ

つ

じゅうあく

なみ

荒

とも、乞う、提婆達多が成仏を続ぎ、十悪の波あらくと

ねが

おうじふつこう

けちえん

おな

も、願わくは、王子覆講の結縁に同じからん。

しょうにんい

ひと

こころ

みず

うつわ

もの

聖人云わく、人の心は水の器にしたがうがごとく、物

しょう

つき

なみ

うご

に

ゆえ

なんじ

とうざ

しん

の性は月の波に動くに似たり。故に、汝、当座は信ずと

ごじつ

かなら

ひるがえ

まきた

ききた

そうらん

いうとも、後日は必ず翻さん。魔来り鬼来るとも、騒乱

そ

てんま

ぶつぼう

憎

げどう

ないどう

することなかれ。夫れ、天魔は仏法をにくむ、外道は内道を

嫌

い

こんぜん

す

しゆる

うみ

い

たきぎ

きらう。されば、猪の金山を摺り、衆流の海に入り、薪の

ひ
さを
火を盛んになし、
ことにあらずや。

かせ
ぐら
増
風の求羅をますますがごとくせば、
あに好き